

あいさつ クラスの、サークルの、名簿作りましたか	辟雍会会長 荒尾 禎 秀	2
特集 就職とは？ 社会とは？		
・座談会 現役学生は、何を悩み、何を望んでいるのか		4
・苦手な挑戦・気が付けは天職	弁護士 磯崎 奈保子	8
・お金を稼ぐということ	サイエンスプロデューサー 米村でんじろう	10
・“ケガ”の功名から始まった人生	劇団東演 山田 珠真子	12
・挑戦こそわが人生	FM NACK5 田中 秋夫	14
・幼稚園のころからの憧れの職業	原市小学校教諭 富山 めぐみ	16
・コーチング能力では負けないぞ	FDK (株) 片山 尚 広	18
・音楽科から保険会社の営業に	第一生命相互会社 尾崎 恵 実	19
・「異端学生」から「異端社員」へ	デザイナー 安藤 則 浩	20
・教員をめざす後輩に求めるもの	前小平第六小校長 稲田 百 合	22
キャンパスでふれあう		
・歴史にふれあう、文化にふれあう 附属図書館蔵の絵双六を復刻	黒石 陽 子	24
・走って、歩いて、飲んで、話して 武蔵野ふれ愛ラン&ウォーク	渡辺 雅 之	28
・特別寄稿 フクロウとの交流で学んだもの	学 長 鷲山 恭 彦	30
・音楽にふれあう ホームカミングデーの音楽祭	筒石 賢 昭	33
輪を広げる		
・Uターンのおすすめ	富山支部 草野 剛	34
・14年の歴史を刻んで	石川支部 若林 勝	35
集まっています=タテとヨコ		36
家庭科同窓会 (さゆり会) 音楽科同窓会 生物科同窓会 書道科同窓会 (硯心会)		
学芸の森を育てる		38
帰って見ませんか		
こんなにあります「公開講座」		40
辟雍会活動 1年をふりかえる	幹事長 池田 義 人	42
こんなことしました、こんなことします		
事業部・組織部・広報部		44
編集後記		48



■ クラスの、サークルの、 名簿作りましたか

多くの人がそうなのであると思うことの一つは、暮れ3月になると、八月末になると、今度こそは思い新たに飛躍しようという反省と決心を抱くがなかなかそれは実を結ばない、ということ

桜咲く春4月が来た。また新たな決心を胸にしなからの春である。

辞雍会が2004（平成十六）年4月から本格的に活動を始めて3回目の春である。辞雍会は卒業生、学生、教職員、在職した教職員からなる、「オール学芸」の組織である。しかし開学以来五十余年にして出来た卒業生を中核とする全国組織であるため、「辞雍会」設立の周知も十分でなく、そのためもあって卒業生の組織率はいまだ微々たるものである。これに対して学生会員のほうは、今年度はその約4分の3が会員となる。その構成員のバランスは現状では非常に悪いといわざるを得ない。

しかしながら、確実に組織の根がはえ、伸び、張ってきていることは、青森に続いて、岩手、富山、石川の各県に支部が設立されたり、教室や、学科、クラスなどでの同窓会作りがこの辞雍会ができたことが刺激剤となって活発化してきていることなどから、断言できる。

私は本学（国語）を卒業後、そのまま残って教員をしているが、担任をしていたクラスのうちのいくつかで名簿作りが進んでいる。おそらくあちこちのクラスでそういうことが起きているのではないと思う。学生時代に自分が所属していたクラスの名簿作りの方は出来ていないようだ。これはそういう仕事をやる人がいるかないかに係っている。ボランティアでの名簿作りは大変なエネルギーと時間と金がある。ましてや今の世の中、個人情報保護の時代で



辞雍会会長 荒尾 禎秀

ある。よっぽど熱心な人がいないと、またよほどクラスの人々が応援を送る環境にないと、完成させるのは困難だと思われる。だから名簿を持っているのは恵まれたクラスだといえよう。

よく辞雍会は何をやるのか、入会しているとどんなメリットがあるのか、といった質問を受ける。辞雍会は何をやるのかという前者の質問には理事会は答える義務がある。会の目的にかなった活動をしていかなければいけないのだから。しかし後者の「メリット」についてはどうなのであろうか。

クラスレベルで名簿を作り、何かに事寄せてみんなで集まり、あるいは情報交換をする。参加したくないもの、できないものまで首に縄をつけてなどはしないが、それでも皆あの人はどうしているかなと機会があればふと思いやる。それが4年間一緒に過ごした仲間なのだろう。時間の共有を根源にしたそのような空間に、何のメリットがあるかなどという質問は場違いであろう。メリットがあるからその結びつきをその後も維持するのではないだろう。メリットなどはじめからないのだ。あるとすれば、もしかしたらいつか何かでメリットがあるかもしれない結びつきを維持できるということがメリットなのだろう。

クラスなり課外活動なりで、あれこれのことを共有し、それなりの「文化」や人間関係をつむいできたという、ただその一点でのユニット。これが、点であるなら、その点が、線となり、線は縦糸と横糸とになり、それは更に面としてつむぎだされる。その織物は、ただ、東京学芸大学というところで学んだ、という一点での共通点。点としての

ユニットにメリットといったものがもともとないのならば、その広がりである面たる織物にもメリットは自明には存在しない。あるとすれば、もしかしたらいつか何かでメリットがあるかもしれないという結びつきを保証されるということであろう。

クラスやサークル、クラブ、大きな場合は学科や教室、そういう集団が束ねられる時、辟雍会はそのセンターとして力を発揮するのであろう。その構成員は、メリットを持つかもしれない「場」の提供を受ける特典がある。

クラスやサークルなどを通じての結びつきを持たない人はどうするか。

辟雍会の会則では、加入資格は個人である。だから、クラスで加入したり、県で組織加入するということはない。個々人が加入するのが原則であるが、会員がその属性に応じて集まりを作り支部化するのを妨げてはいない。

大学創設以来50余年が経っているので、当然全国各地に様々な卒業生のグループが出来ている。数人の集まりから、大変立派な組織と歴史を持った集団まで、様々である。そのすべての単位がそのまま総結集して辟雍会となれば、それはそれで結構なのであるが、実際はそうは行かない。それらの様々な集まりはそのままそれぞれの特徴を維持しながら活動を続けたいと思う。辟雍会には個々人が加入し、その会員が、相違として支部化するならそれはそれで歓迎するということである。活動している既存の卒業生グループが、いきなり支部として丸ごと辟雍会に入るということは、現状では現実的でないし、混乱を引き起こすと思う。全国組織としての辟雍会、というものをよとする個々人が、まずは加入するところから、事は始まる。

卒業生は様々な形で辟雍会に結集するのがよい。個々人が旗の下に結集することが先で、組織的つながりは後からついてくる。

辟雍会は具体的に何をやるのか。

この2年間の活動には多くの方のアイデアをいただき、辟雍会の目的にかなった事業を展開してきたと思う。しかし一方で常に点検を求められていたことは、それぞれの事業は「卒業生にとってそれは意義あることなのか」という

ことであった。

辟雍会の事業の対象には4つの層がある。卒業生、在校生、教職員、大学である。いずれに対しての位置づけの事業かがまず問われる。重層的な事業が好ましいが、趣旨、目的にかなっていれば単層を意識したものでもかまわない。ただ、この会の中核はやはり卒業生であるから、そのことを意識しないわけにはいかない。

これらの事業はいずれも4つの層を意識し、誰がそれを望んでいるかを考えながら実施した。ただ、事業の決定に当たっては、少なからず「卒業生にとって意義あること」か、という観点からの異見が出されることが多かった。

辟雍会をアピールし卒業生に入会してもらうために、またいささかでも母校のプラスになるために、という点でこれらの事業は行われたが、「卒業生にとって意義あること」であるかどうかは評価の分かれるところもあった。

卒業生からの「声」が届いていないことに問題の一つはあるのではないかと思う。卒業生会員が、残念ながらまだ少ないということと、ことは直結している。

もう一つの問題は、届いた声を実現するための人員が足りないこと。辟雍会には総務部、事業部、広報部が、今のところ置かれている。広報部は母校教員以外の会員が仕事をしている。学生通信員も置くことにした。なお、全国に広く会員である通信員を対置することなどが考えられる。総務部や事業部も学生や多彩な卒業生の支援をどのように得るのが懸案である。

素敵な会員証が出来た。ホームページも1年間に延べ1万5千人が見ているようになった。少しずつだが、卒業生会員も増加している。事業も期待されるものが増えてきているし、会員からの提案も多くなって来ている。

春めいた陽射しを感じるものの、同窓会を組織・運営することは、本当に難しいというのが、会長をこの2年間務めてきた率直な感想である。

飛躍しようとして、思うようにはならなかったこれまでの何度にもなる経験を省みれば、おそれることなく、また今、飛躍を決心すればよいのだ、この春にもまたそう思う。

座 談 会

◎ 現役学生は、何を悩み、何を望んでいるのか

出席者

山本 祐輔 (A類数学1年)

栗原 悠太 (J類情報教育1年)

三浦 俊吾 (A類数学1年)

大沼 宏江 (K類アジア教育1年)

熊谷 拓哉 (K類アジア研究1年)

長谷川 隼也 (A類理科2年)

松本 悠司 (C類障害児教育2年)

本郷 稔 (J類情報教育4年)

岩井 直美 (B類美術4年)

大学はもちろん「学問の府」であり、教育と研究の機関です。しかし、通常4年間の学園生活が終わると、いわゆる「就職」という形で実社会に出て行きます。かつて東京学芸大学は義務教育を中心とした教員を養成する単一目的大学でした。その当時は「就職」とは教員になることであったのです。そのコースは今も基本的には変わっていませんが、いわゆる「教養系」の学生は、教員以外の道を求めるものも数多く存在します。そこで改めて「就職」が人生の重要な節目になります。もっとありていと言えば、3年生、4年生にとっては「就職活動」(就活)が不可欠になっているのです。世間には東京学芸大学=教員養成大学のイメージが今なお色濃く残っています。それは教員以外の職業を目指そうとする学生には、ある種のハンディキャップになっていることは否めません。

そこで現役の学生諸君に集まってもらい、就職をどう

考え、また何を悩んでいるのか、などを話し合ってもらいました。

長谷川 4年生の先輩お二人はもう就職活動も終わって就職先も決まったのですよね。どんな活動をされたのか。どんな苦労があったのかお聞かせください。



岩井 私はグラフィックデザイナーが志望で、そういう求人があるかどうかリクルート・ナビなどで探しました。私が求める仕事と会社が求める人材と合致するかどうか、そこが問題で、すいぶん説明会なんかに足を運びました。実はこれが案外バカ



にならないんです。つまり交通費がかかるということ。だいたい企業と言うのは都心にあるでしょう。小金井から行くのは大変です。履歴書をいっぱい書かなくてはならないし、そのための写真を撮るのもお金がかかった。これは就職活動を始めてからわかったことだね。

松本 学芸大だということで不利なことはなかったですか。

岩井 それは特に感じなかった。でも私は一人暮らしでしょ。面接官にかなり厳しく突っ込まれて苦しんで帰った後も、家族に打ち明けてストレスを解消すると言ったことができなかった。それが辛かったかな。あ、それとね、教育実習と会社の面接が重なって……。教育実習やめるわけにはいかないから、結局その会社をあきらめるしかなかった。これは学芸大であるが故のマイナスかな。



松本 本郷さんはどうでしたか。

本郷 僕は教員にも魅力を感じていたのだけれど、結局、国家公務員一本に絞りました。警察庁の情報機関に就職することに決まったんです。なぜ国家公務員かという、やはり安定志向なんでしょうね。民間企業ではその採用基準に何か不透明なものがあるような気がして、その点、公務員の試験は透明だと感じたんです。でも実際の試験は大変でした。試験勉強も大変だったし、面接を何度もうけてすいぶん時間的にも拘束されました。ところで岩井さんの言われた教育実習とかち合った問題ね。これは仕方がないんじゃないかな。学芸大の宿命みたいなものですね。



松本 岩井さんはB類で教育系（教員養成課程）ですよ。教員志望ではなかったんですか。

岩井 ええ、最初から教員志望ではありませんでした。B類を選んだのは、グラフィックデザインを仕事にして行こうとするとき、有利なのではないかと思ったからです。それで実際の就職活動でも教育系の美術科出身を受け入れてくれる会社を探しました。

松本 僕はもうすぐ3年になるのでそろそろ就職のことを真剣に考えなくてはならないのだけれど、この大学に来たのは子供が好きで、教員になりたいと思ったからです。でも最近は少し不安になってきています。僕には教員の資質があるのかどうかとね。教員以外の職業も考えなくてはならないのか、と少し悩んでいます。



長谷川 僕は教員以外の仕事はまったく考えていません。ただ、このまま教員になってしまうと、本当に狭い社会しか知らないことにならないか。視野の広い教員になるためには一般企業での体験も必要なのではないか、などと考えます。一般企業と教員の社会の違いをもっと知りたいです。

大沼 私はK類という「教養系」なんですけど、教員志望です。なぜK類なのかというと、大学院に進んでさらに勉強と経験を積んでから教員になりたいと思っているからです。また、アジア研究というのは本当に広い視野が要求されるので、学べることが多い。ただ、大学院を終わった後の就職という問題はありますね。

熊谷 僕も大沼さんと同じK類のアジア研究だけれど、正直、教員か一般企業か、どちらにしようかと考えています。一応教員免許は取りたいので、そのための授業は受けていますけどね。（注・「教養系」とは教員免許の取得が卒業の条件とはならないコースのこと。ただし、教員免許取得のための単位を補充すればいいので、実際は教養系の学生の多くが教員免許取得のための単位

を取得している)

栗原 僕もJ類という「教養系」です。そして僕も教員志望なんです。なぜ教養系の情報教育を選んだのかと言うと、実は数学の教師になりたいんですね。それで数学の免許も取れて、さらに情報教育の免許も取れる。二つの免許を手に入れるにはこのコースがいい、ということで選びました。

三浦 僕はA類（小学校教員養成課程）で数学専攻です。そして教員になりたいから、教員になるためにこの学校に入りました。でも入ってみると、大学と言うところは幅広い知識を取り入れるところであることに気がつきました。このままではだめで、もっともっとがんばらないと……。でも子供が好きなので、小学校の教員になりたいと思っています。



山本 僕もA類数学で教員志望です。僕は中学校の数学教師が志望です。なぜ中学校かと言うと、自分の体験から部活が非常に魅力的なので、中学校で子供たちに部活を通じての感動的なシーンを味わわせてやりたい。でもA類に入ってみたら、いろんな授業があるし、免許も取りやすいみたいだし、結果的に良かったと思っています。

—— 今日集まってくれた人は教員志望が多いようだけれど、なぜ教員になりたいのかな。

山本 多くの人で出会う仕事でした。小学校の教師になったら毎年40人ぐらいの子供と接するわけですね。それがどんどん積み重なっていく。そしてその子供たちがそれぞれに夢を実現させようと成長していく。それが見られるのは幸せだと思う。

三浦 中学生の頃から漠然と学校関係の仕事につきたいと思い始めました。子供が好きなので子供と接することの出来る仕事は教員ぐらいしか思い浮かばなかった。

栗原 何か人のためになる職業につきたいと思っていました。親はサラリーマンだったから、親と違う仕事がしたかった。最初は医者になろうかと医学部を目指したんだけど、断念して、ほかに人のためになる仕事は……と探して教員に行き着いたんです。できれば高校で受験生の相談相手になりたい。そして合格の感動を分かち合いたいと思っています。教員は生徒とずっと交流が続くと言うイメージがありますよね。



長谷川 僕も中学生の頃であった先生の影響が大きいな。その先生にいろいろ相談をして、本当に支えになってもらいました。だから僕も教員になって子供たちの支えになりたいし、そうすることがお世話になった先生への恩返しになると思っています。

松本 僕もそうです。小学校にも中学校にも憧れる先生がいました。それとテレビで素敵な先生が登場していたことの影響も大きいかな。

本郷 実は僕も栗原君と同じように医学部を目指していたんですよ。それをあきらめて教員養成の大学に来ただけで、なぜ教員にならなかったかと言うと、教員には単に教えるということ以外の仕事がたくさんあるみたいで、僕のイメージと違うと思ったからです。

岩井 私は逆にこの大学に入るまで教員と言う仕事についてはまったく考えたことがなかった。ところがだんだん教員に興味を持って一時は真剣になろうかと思ったこともありました。それで3年になったあたりで教員のための勉強を始めよう

小学校にも中学校にも憧れる先生がいました。

かとした時、もう一度自分は教員に向いているかどうか考えて、私はやっぱりグラフィックデザインをやりたいんだと思いなおして、教員をやめました。でも正直ぐらつきました。グラフィックデザイナーに本当になれるかどうかわからないし、生活だって不安定かもしれないし……。でも生活の安定を求めて教員になるのでは子供に失礼だと思ったし、1回の人生だから自分のやりたいことをやろう、自分の夢を実現させないのはおかしいと思って、3年の12月から就職活動を始めました。

熊谷 僕も憧れの先生がいたということで、ああいう先生になって子供たちにも僕と同じことを感じ取って欲しいと思ったのが志望の動機で



す。アジア研究を選んだのは中国語を勉強したかったからです。まず中国語を見つけて、それからがんばって教員免許を取りたいと思っています。

大沼 私の場合は高校生の頃ですね。教員を意識し始めたのは。私の通っていた高校にはいろんなタイプの先生方がいました。教員をしながらさまざまな研究をしている方もいました。それがとても魅力的で興味を持ちました。



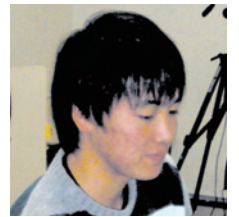
——— 岩井さん、大沼さんは女性ですが、女性の仕事について考えることはありませんか。

岩井 面接試験でも、せっかく教員の道があるのになぜ一般企業に行くの、と必ずとっていいほど聞かれました。教員は女性にとっていい仕事だと思われていますよね。私は将来的にはフリーで仕事をしていきたいと思っています。フリーのイラストレーターだと家にいて仕事ができるでしょ。結婚して子供が生まれても、在宅で仕事ができるということを考えると、フリー

が一番いいように思うのです。

——— 一般企業への就職活動はほとんどが東京ですよね。教員でも東京など都会の教員になるのかな。地方での就職と言うことは考えていませんか。

山本 僕は故郷の群馬に帰って教員になりたいと思っています。やっぱりあの広々とした雰囲気が好きなんです。



栗原 僕もできれば故郷の母校の教師になりたいと思っています。

本郷 確かに自分の出身地に帰りたいたいと考える学生は多いみたいですね。僕の回りにも結構いる。学科によって違うのかもしれないけど。

——— 今、教育系と教養系の比率はほぼ半々ですよ。つまり学芸大学の出身でも半分は教師にならないわけだ。ところが世間ではまだまだそうは見えていない。学芸大学出身者は全員が教員になると思っている。本郷君、岩井さんのように教員以外に就職する人は、どうか後輩たちのためにもがんばっていただきたいと思います。教員になる方もあまり東京への一極集中ではなく、地方の振興と言うことも考えて欲しいと思います。実はこれは全国同窓会「辟雍会」の宣伝でして、学芸大学の卒業生は日本全国にいます。そのネットワークを大いに活用してください。また皆さんも会員なので、これから辟雍会をどんどん盛り上げて行って欲しいと思います。皆さんは先輩とか卒業生とかを意識したことはありますか。

一同 いいえ、あんまりありません。

——— そこが他大学と違うところですね。学閥という言葉がありますが、出身大学で差別があるわけでは無いでしょうが、同窓生と言う絆は結構強いものがあります。教員以外の学芸大卒業生はこれからその絆を作っていくわけです。今日はその第一歩でした。

◎ 苦手な挑戦・気がつけば天職

— 学芸大に「法学部」はないのに —



弁護士
礒崎 奈保子
1988 (昭和 63) 年家庭科卒

はじめに

昨年11月、法律相談で東京学芸大学に伺ったとき、約20年ぶりに小金井祭に参加致しました。

おもちゃ屋さんの出し物の前で群がる子どもたち、くまのプーさんの着ぐるみを着た学生さん、おいしそうな食べ物のおい、寒さの中、外で行われたプロレス・・・などなど。

なにか他の大学と違う、子どもの教育に携わろうとする方たちの集まりが醸し出す、独特の雰囲気を感じました。

人の争いの中に身を投じるという弁護士の職業柄か、心が洗われるような気がして、嬉しく思いました。

そして、「私もこの世界の中にいたのだ」と、思い出が頭の中を駆けめぐりました。

私の大学生生活

私は、もともと心理学に興味を持っていたのですが、高校の先輩で、当時、学芸大の学生だった方から、

「学芸大には、児童心理で有名な先生がいっぱいいるし、学閥、特に東京の小学校での学閥があるから、学芸大はいいわよー。ぜひいらっしゃいよ。」

と勧められ、児童心理学が学べるA類家庭科（初等教員養成課程家庭科選修）を受験し、運良く、総代として入学しました。

大学では、比較的多くの単位を取り、小学校教員免許状（全科）、中学校教員免許状（家庭科）、高等学校教員免許状（家庭科）を取得しました。

「人は、職業や立場によって異なる心理状態に陥るのではないか」との問題提起のもと、学生時代、アルバイト（出版社編集・商社受付・営業・塾講師・家庭教師など）もよくしていました。

3、4年生の時、合計で8週間、教育実習をしたのですが（附属小・中、公立小）、大勢の前で話をしたり、授業の展開（導入→本題→まとめ）を考えたりすることは、とても勉強になりました。

特に、教員にならなかった私にとっては、「教壇に立った」貴重な経験となりました。

「教育実習生が帰った後、担任の先生はクラスを元の状態に戻すのに苦労される」という話をよく耳にしましたが、それでも教育実習を成功させるために尽力下さった、指導担当の先生方はじめ、多くの方々に感謝申し上げます。

ところで、「肝心な」法律ですが、私は、学生時代、まったく興味が持てませんでした。おそらく「自分には関係ないもの」「縁のないもの」と思っていたのでしよう。

ですから、将来、私が法律家になるなんて、誰しも想像だにできなかったに違いありません。

でも、今思えば、法律に興味を持てなかった理由は、幸いなことに、大したトラブルに巻き込まれることもなく、「法律を必要とする環境になかったから」だと思います。そういう意味では、恵まれていたのかもしれない。

法律家になるまで

本来、心理学に興味があったならば、そちらの道に進むべきなのでしょうが、心理の仕事に関してはわからないことが多かったので、結局、私にとっては、現実味のないままとなってしまいました。

大学卒業後は、自分の最も苦手な分野を克服しようと、コンピューター関連の会社に勤めました。

確かに、自分なりに苦手な分野を克服できたのですが、一日中、機械だけに囲まれて仕事をするのは性に合いませんでした。

そこで、人間相手の仕事をしようと思い、新聞社の社長秘書をすることにしました。

上記社長が、多才で、経済評論家でありながら、作曲もされ、また、いくつもの会社の取締役・監事を兼ねていらしたので、私は、自分の力ではできない、多くのことを経験することができました。

証券界はじめ企業のトップクラス、政治家、芸能人、マスコミの方々などが出入りする中で、刺激的な事柄を見聞きしました。

ほぼ毎日、講演会に付いて回り、日帰り、週に3回は、全国を飛び回っていました。

取締役会に参加したり、取締役間での派閥争いなども見開しながら、会社の実態を垣間見ることができました。

そうこうしているうちに、職場の同僚から相談を持ちかけられました。かなり深刻な相談でした。私は、その同僚の悩みを解決しようと、自分なりに調べてみました。すると、法律が友人を守ってくれるということがわかりました。

このとき、やっと法律のありがたみがわかったのです。

その後も、私は法律の本を読み続けました。法律を知らない人たちに教えたい、そんな単純な発想でした。

そんな時、ある知人から、

「そこまで法律を勉強したのなら、司法試験（法律家になるための試験）を受けたらどうか。日本で一番難しい試験と言われているけれど、君なら合格できるよ。」

と言われました。

それまで無縁と感じていた法律家の仕事が、その時、急に身近なものと感じられました。

私は、不安はあったのですが、「君なら合格できるよ」という知人の言葉を信じて、法律家になるための勉強を始めました。

大学時代、必修の憲法の時間が苦痛で苦痛で仕方なかったのに、「基本的人権の尊重を高らかに謳う憲法」が大好きになりました。特に、「幸福を追求する権利」（「幸福になる権利」ではない）に込められた意味合いが、心にじっくりきました。

（途中、苦労はありましたが）その後、私は運良く司法試験に合格することができました。

もし、あの時、知人が私に司法試験の話をしなかったなら・・・、きっと今、法律家になっていなかったと思います。（その後、私はその「知人」と結婚しました。）

ここにたどり着くまで、随分と回り道をしたように思います。最近、他学部出身の法律家も増えていますが、それでも、高校から法学部に進み、そのまま司法試験を受けて法律家になった方がほとんどです。

ですが、回り道をしたからこそできた経験や苦労は、今の仕事にとっても役立っており、私にとっては、大事な財産です。

「法律だけを勉強していた訳ではない」というのが私の自慢です。「人生、無駄なんてない」と思います。

それにしても、人の人生はわからないものです。あんなに法律に無関心だった私が、法律家になり、しかも、今は、それが天職だと思えるのですから・・・。

最後に

東京学芸大学の卒業生の一人であること、これは私の誇りです。

学芸大の在校生・卒業生の方々はじめ、大学関係者の方々の、ますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

インタビュー

◎ お金を稼ぐということ

— 今まで誰もやらなかった仕事 —



サイエンスプロデューサー

米村 でんじろう

1982(昭和57)年大学院理科教育専攻科修了

—— 経歴を拝見すると教員の経験もおありですね。学芸大には教員になる目的で入学したんですか。

米 村 いいえ。まじめに教員を目指して入学してきた人には申し訳ないのですが、僕は学芸大しか入れるところがなかった。千葉県出身なのですが、早くに父をなくして家はとても貧しかった。それで大学は国立以外に行けない状態だったので「やむを得ず」学芸大でした。

—— それでも卒業してすぐの就職は高校教師でしたよね。それはなぜ。

米 村 理科で物理が専攻だったのですが、学部を卒業して大学院に進んだ。そこも終わって、なんとなくそのまま大学に残ったんです。研究生ですよ。そんな時、いわゆるアルバイトのような形で講師の仕事があって、その前に教育実習なんかもやっていましたから、働くなら教師がいいかな、なんて思い始めていたんです。自由学園で数年間、講師をしたのも教師をまじめに考えるきっかけでした。

—— そして都立高校の教師をやられたのですね。

米 村 ええ。最初に赴任したのは東京郊外にあった高校でした。いまはもうなくなっているのですが、授業に興味も関心も無い生徒が多くて、生活指導の担当は大変だったと思います。しかし、僕にとってはとってもし有意義な学校で、生徒たちとも結構仲良くやっていました。それでそこに8年もいたのです。それから小金井市にある

学校に転勤したのですが、こちらは同じ高校生とは思えないようないわゆる「いい子」が集まった学校でした。そこで3年間やっていましたが、僕自身はなんとなく「教師はもういいかな」なんて思い始めたんです。それで11年を節目にやめました。

—— 「転身」ですね。辞めた後のめどはあったのですか。

米 村 いいえ、まったくありません。無謀と言えば無謀ですよ。こんなことができたのも実は妻のお陰なんですね。妻は同じ学芸大の大学院出身で、私立小学校の教員をしております。彼女が支えてくれたので、辞めてしまった後に、さて何をしようか、なんて暢気にいられたのです。

—— なんだかとても大事な人生の話になってきたようです。それでどんな結論が出たのですか。

米 村 教員の時代からテレビ（NHK）の教育番組のアドバイザーと言うか、企画のお手伝いみたいなことをしていたのですが、そのうちに企画だけを考える裏方ではなくて、自分が出演してやってしまう方が手っ取り早いということになりまして、企画、構成、出演のようなことを定期的にやるようになったのです。まあ、ここで大事な人の出会いがありまして、僕にそのような仕事を任せてくれる人がいたわけです。

—— そのテレビ番組が評判を呼んだわけですね。

米 村 おかげさまで……。そのうちテレビだけではなくて、実際にこちらに来てやってくれないか、と

というような話も出てきて、大変に忙しくなってきた。

———それを職業、ビジネスにしようとは最初から考えていたのですか。

米 村 いやいや。最初はギャラと言う概念がわからなくて、仕事が終わって「請求書を出してください」といわれるんですが、一体いくら請求したらいいのか見当もつかない。あまり高く請求するともう仕事をもらえないかもしれないし、安すぎるのもなんだか自分を安売りするみたいで、本当に悩みましたね。それまでの人生で「お金を稼ぐ」という認識は一度もありませんでしたからね。給料はもらっていたけど「稼ぐ」という意識じゃありませんよね。

———そうですね。すごく大事なポイントです。だいたい就職と言うとどこかい会社に入って、あるいはやりがいのある仕事を見つけて・・・と言うことは考えますが、どうやってお金を稼ぐか、とは考えません。せいぜい給料のいい会社とか、どこの自治体の待遇がいいか、とかは考えますがね。とりわけ学芸大の学生は自分でビジネスを始める、自分ひとりで稼ぐことを考えるなんていうのは、ほとんどいないでしょうからね。

米 村 日本社会の特徴なのでしょうか。「稼ぐ」とか「お金」ということを話題にするのはなんだか卑しいことのように考える風潮があるようです。しかし、これはとても大事なことですよね。お金をいただくと言うのは、その対価として自分にニーズがある、必要とされていると言うことですからね。僕のアイデア、僕の能力が今必要とされていると言うことですから、卑しいことでもなんでもない。それにお金は一箇所にとどまるものではありません。僕を通過してまたほかに流れていく。つまり「流通」するものなのです。

———これは学芸大の後輩たち、これから就職活動を

する現役学生たちには貴重な助言です。後輩たちにすばりメッセージを寄せてくださいますか。

米 村 学芸大の学生はよく言えば「まじめでよく勉強する」。しかし、何かを開拓するとか、挑戦するという意識には欠けるように思います。これは学芸大学に限らないのかもしれませんが、最近、僕の事務所でもスタッフを採用しようと思って求人をしたのですが、この世界に飛び込んでこようと言う人がほとんどいない。みんなもっと「安定」を求めるのでしょうか。学芸大生は、もっとそんな意識が強いのではないのでしょうか。就職は「一生の仕事」などと決め付けないで、まず飛び込んでみる。そこからいろんな可能性を見つけ出す、というふうに考えてみたらどうでしょう。先のことは本当にわかりません。10年前の僕は、自分がこんなふうになるなんて想像もしていませんでしたよ。この間に、いろんなすばらしい出会いもあったし、人生は日々、刻々変わっていくものだと思いますよ。「まず飛び込んでみる」というような元気な後輩を待っています。

■米村 でんじろう 氏プロフィール

大学院理科教育専攻科修了（1982年）後、自由学園・講師、都立高校教諭を勤めた後、広く科学の楽しさを伝える仕事を目指し1996年独立。現在、サイエンスプロデューサーとして、科学実験等の企画・開発、サイエンスショー、各種テレビ番組、雑誌などの企画・監修・出演などで幅広く活躍中。段ボールで作る空気砲、割れないシャボン玉など、アツと驚く数々の楽しい実験で子どもから大人までの人気をさらっている。

◎ “ケガ” の功名から始まった人生

— 演劇一すじ、四十七年 —



劇団東演

山田 珠真子

1961 (昭和 36) 年家庭科卒

「どうして演劇をやるようになったのですか」とよく聞かれます。答えはいろいろありますが、結局のところ芝居が好きだから、そしてその時々の流れに添って生きているうちに、いつの間にか四十七年も芝居の世界に居続けてしまったということでしょう。

私はまだ学芸大に在学中に、劇団東演の研究生になりました。きっかけはほんの些細なことでした。大学受験のとき、私は学芸大しか受けませんでした。試験は自分の感じでは上手くゆかなかった。落第したら就職しなければならぬ。でも普通の仕事はいやだから、アナウンサーか声優になろうと思いました。私の母は教員をしていたのですが、その教え子にラジオに出ている人がいたからです。声だけなら不器量な私でも何とかなるかもしれないと、アナウンサーと声優の養成所に入ることになりました。幸い大学には受かったのですが、せっかくその気になったのだからと、養成所にも通いました。半年ほどたって、その養成所の仲間が「声だけではつまらない。やっぱり芝居だ」ということで、芝居の稽古も始めました。でも仲間同士ではなかなか上手くゆかない。基礎からきちんと教えてくれるところを探そう。私は大学もあるので、夜に養成所を開いているところを探して入ったのが「劇団東演」だったのです。学生と劇団研究生の二重生活。大学は級友たちの支援のお陰で、何とか卒業できました。家庭科でしたから、提出しなければならない製作品もたくさんあったのですが、多くは友人の手助けで何とか凌ぎました。同級生の友情にはほんとうに感謝しています。

私の夜の養成所通いを、大学のサークル活動の一つく

らいだろうと大目に見ていた私の両親は、私が教員になる気がないのを知り、猛攻撃してきました。両親とも教員でしたから……。私の家の斜め向かいに澤地久枝さんが住んでいらしたのですが、澤地さんと私はその境界の不良少女といわれていたそうです。そういえば「澤地さんのお嬢さんみたいになったら困るね」という言葉を聞いた覚えがあります。わたしもきっと「山田さんのお嬢さんみたいになったら困るね」といわれていたのでしょう。マスコミの仕事などで、明け方になって車で送られてきたりするのは、両親には耐え難いことのように思いました。二十四歳で私は家を出ましたが、その後、たまに家に帰った時にお客様が見えたりすると「あなた人に何やかや聞かれないでいいでしょう。裏に靴を回しておいたから裏からお帰りなさい」と追い返されたものです。

マスコミの仕事もめったになくて、アルバイトで生活していたからいつもお金がなくて「お米買い忘れたから少し頂戴」と家に行くと、苦労知らずの母は封筒に一合の米をサラサラ入れて「明日の朝の分だけでいいのね」と渡してくれました。苦労人の父は「いくら少しといってもそんな少し渡すもんじゃない」と手拭いで作った袋にたっぷりお米を入れてくれたこともありましたが、でもそういう境遇が私を強くしてくれたのでしよう。何とか自分でやっていかなければ、という覚悟が、だんだんついてきたようです。研究生から劇団員になってほどなく、日中青年友好祭が中国であるので、十五の劇団から一人ずつの代表を送るということになり、私は一番若い代表として選ばれました。ずっと後になって、私が選ばれたいきさつを聞きました。六十年安保の時の

ことです。あの樺美智子さんが殺された六月十五日の昼間、私は新劇人会議のデモに参加していて、右翼の暴力団に襲われ、頭を怪我しました。その体験を新劇人会議の総会か何かの折に話したのを、滝沢修さんが覚えていてくださって「一番若い子はあの娘にしよう」といってくださったのだそうです。何が幸いするかわかりません。右翼に襲われたことが、その後の私の芝居人生にとって大きなきっかけになり、また私の劇団にとってもその後の進路に大きく係わることになったのですから。

その訪中新劇人会議代表団の中に五月女道子さんという女優さんがいらして、帰国後親しくお付き合い頂いたのですが、彼女の夫の宮沢俊一さんがロシア文学者で、一九七〇年からモスクワの出版社に翻訳者として行くことになり、彼女も同行することになりました。その送別会の夜「珠真子、片道切符だけ買ってモスクワにいらっしやい。家に泊められるし、帰りの切符は買ってあげるから」というのです。暢気者の私は願ってもないことと、次の年の九月に片道切符を握り締めてモスクワに向かいました。「いつまで居られるの」というので「革命記念日のパレードを見て帰るわ」と言ったのです。私は十月革命の十月まで、というつもりだったのですが、今の暦では革命記念日は十一月。そんなわけで二ヶ月も宮沢・五月女夫妻にお世話になりました。

二人とも相当なスパルタ教育で私を鍛えてくれました。着いた日の夜、夕方のモスクワ到着だったのに、夕食を終えるとすぐ、十時からのモスクワ芸術座のロビー公演を観劇。翌日は朝食を済ますとすぐ車で郊外の植物園まで連れて行かれ、ロシア語の会話帳を渡されて「一日ここで遊んでいらっしやい」と言われたのです。私は全然ロシア語を知らないのに……。一日たっぷり時間はあります。私は人々のやり方をじっくり観察して学び、貸しボートに乗り、ポンチキという揚げドーナツに粉砂糖をかけてもらってお腹を満たし、市電を乗り継いで暗くなるころに帰り着きました。夜はほとんど劇場通いで、あの頃の私ほどロシアの芝居を見ている人はいないからと、本を書くことを勧められましたが、忙しさに取り紛れてしまいました。

一九七三年にはそのとき見た芝居の一つ「夜明けは静かだ……」をご夫妻に翻訳していただいて上演しました。これは今でも私の大好きな芝居の一つです。この上演に当たっても、上演許可をもらったり、資料を集めたりで、また一ヶ月モスクワでご夫妻にお世話になりました。その後も私は毎年のようにモスクワに行き、何本もロシアの現代劇を翻訳していただいて上演したり、ロシアの演出家を招いて演出していただいたりして、劇団東演とロシアの繋がりが深まって行きました。今はもう、ご夫妻も亡くなってしまわれましたが、私には忘れられない恩人です。

恩人と言えば、私が訪中代表団で行けるようにして下さったのは、劇団の演出家の八田元夫氏です。先生はお金のない私に「出世払いでいいよ。せっかくのチャンスだからね」と、参加費を立て替えてくださったのです。本当に多くの方々のお陰で今があるのだと、つくづく思います。

ベートーヴェンの「月光」を弾いて行った特攻隊員の行方を捜す「月光の夏」、そして中国の現代劇「長江」。私がこのごろ演じ続けている二つの芝居ですが、両方も元小学校教員の役です。この二つの役に巡り合った時、私はすぐ単純に思い込む方ですから、この役をやるために私は学芸大学に行き、曲がりなりにも教育実習で生徒の前に立つという経験をしたのだな、と思いました。遠回りしているように思えたり、無駄骨を折っているように思えたりしたこと、全て何か今を支えていてくれるようです。

私は芝居が好きですが、でもこれが天職とはあまり思わずに来ました。今はこれが好きだけれど、もっとおもしろいことが見つかったら、いつでもそっちに行こうと思っていました。しかし出会った人たち、出会った事柄に自然について行くうちに、とうとう四十七年もこの道を歩いて来てしまいました。この先、この道の両側にはどんな景色が見られるのでしょうか。もう分かれ道はなさそうです。多少でこぼこはあってもなかなかおもしろい道でした。

◎ 挑戦こそ我が人生

～ラジオマン稼業40年～



FM NACK5 常務取締役

田中秋夫

1964(昭和39)年社会科卒

PART 1 アナウンサーに挑戦!

私が東京学芸大学を卒業したのは1964年のことであり、今から40年以上も昔のことである。その年の4月に私はラジオ局文化放送の新人アナウンサーとして社会人の第一歩を踏み出した。東京オリンピックが行われた年のことである。アナウンサーという職業には中学時代から漠然と憧れていた。大学時代は授業よりも熱心に放送研究会で活動した。放送局のアナウンサー試験は当時から競争率が高く狭き門だったが、本当にラッキーなことに合格する事ができた。半年の研修期間を経てマイクの前の第一声はひどく緊張した記憶がある。新人アナ時代は失敗の連続で先輩アナからこっぴどく叱られたりもした。当時アナウンサーはNHK的なしゃべり方がお手本であり、タレント的なトークとは一線を画していた。しかし、入社2年ほど過ぎた頃、同期で入社した土居まさる君(故人)が始めたざっくばらんなおしゃべりのスタイルが若いリスナーに圧倒的な人気を博したのだ。「皆さんお元気ですか・・・」で始まる番組が主流の時代に「やあやあ元気かい!ボク土居まさる」が新鮮だった。当然、アナウンス部の中では大問題とされ彼のトークスタイルは先輩達の攻撃的となった。しかし彼は絶対に自分のスタイルを変えようとはしなかった。やがて彼は人気者となり早々とフリータレントの道へ進んだ。その後、みのもんた、落合恵子、吉田照美など後輩達が次々に頭角を現しはじめた。ラジオはアナウンサーの時代からパーソナリティーの時代へと変わっていった。私はニュースを手始めに何本かのディスクジョッキー番組を担当したが、生来の不器用さが災いしてNHK的スタ

イルを脱却出来なかった。やがて私はアナウンサーの道をあきらめ、上司にプロデューサーへの転進を希望し、制作部へ異動することになった。

PART 2 プロデューサーに挑戦

1960年代後半から70年代にかけてラジオは若者文化をリードする存在だった。特に深夜放送は若者達から圧倒的に支持されていた。私がプロデューサーになったのはそんな時代だった。私は深夜放送「セイ!ヤング」をスタートから10数年間担当し、パーソナリティーとして起用したさだまさし、なぎら健壺、笑福亭鶴瓶、谷村新司などの才能と接することが出来た。同時に学生達の間で流行り始めたフォークソングに興味を持ち、何本かのフォーク番組も担当した。当時、大衆音楽は歌謡曲、演歌中心の時代でありフォークやロックはアンダーグラウンドの存在であった。私は音楽の世界はプロの作詩・作曲家の専有物でなくもっと人々に開かれているべきだと考えていた。そして自作自演にこだわるフォークが歌謡曲支配の体制をぶち壊すのではないかと考え応援続けた。当時私は森山良子、さだまさし、南こうせつ、吉田拓郎、イルカ、小田和正など沢山の才能に次々にめぐりあうことが出来た。やがて1970年代前半頃から次第にフォーク、ニューミュージックの大ヒット曲が生まれるようになっていった。その後、大衆音楽の中心は歌謡曲の時代からニューミュージック、J-POPの時代へと大きく変わっていくことになる。私は幸運にもその変革期の現場に立ち会うことが出来たのだ。

PART 3 少数組合の委員長に挑戦

そんなプロデューサー時代に私は柄でもないのに文化放送労働組合の委員長に祭り上げられてしまったのだ。実は文化放送には私が入社する数年前から組合と称する団体が3つも存在していた。元々は1つの組合だったが、財界の大物だった当時の経営者が組合敵視政策を強め、組合は四分五裂に陥ってしまったのだ。その3つの組合の中の「労働組合」こそが元々の組合だったが、その組合に残っていたのは全社員の10分の1以下という絶望的な有様だった。さらに酷いことにその組合員たちは昇給、昇格差別は受ける、関連会社に一方的に出向させられるなど不当な差別がまかり通っていた。

私はこの状況を見て見ぬ振りをする事が出来なかった。私はクビを覚悟でその組合に入り、やがて押されるままに委員長も引き受けた。

私は組合拡大の為に積極的に若者社員たちの中に同志を募ることにした。その結果、少数だが信頼できる仲間を集めることが出来た。当初集まったのは若手と女性社員が中心であり、ベテラン社員たちは「女、子ども組合」と揶揄し、冷笑していた。しかし出向裁判闘争や昇格差別撤廃闘争などをストライキを含め激しく運動を行った。その結果、会社や社員たちに大きな衝撃が広がっていった。すると組合員は徐々に増えていき、第二組合の中からも我々の組合に入ってくる者も出てきた。孤立している様に見えていた状況が次第に変化し、ついに出向闘争にも昇格差別闘争も勝利することが出来たのだ。

PART 4 新天地・FM 新局の経営に挑戦

1980年代後半になると首都圏に新しいFM局が次々に開局した。

音質の面で劣るAMラジオから音楽番組が少なくなり、トーク中心の番組ばかりが目立つようになった。私は「もう一度音楽番組に関わりたい。」という気持ちが募っていた。そんな時、どのようなめぐりあわせか上司から私にFM局への出向の話が打診されたのだ。それが現在私が在籍している「FM NACK 5」である。この局は1988年10月に開局したのだが、当時のFM ブーム

には完全に乗り遅れていた。当時FMといえば「洋楽中心」「バイリンガルDJ」「レストーク・モアミュージック」といった編成で、アメリカのラジオ局そのままを日本に持ち込んだ様な局が人気を集めていた。

ところが「NACK 5」は当時流行りの和製ロック中心の選曲で、出演者もアマチュア集団といった顔ぶれだった。その結果リスナーからもスポンサーからも完全にそっぽを向かれてしまい、なんらかの建て直しが早急に必要とされたのだ。

1990年5月、私は文化放送から出向で「NACK 5」の番組編成の責任者となった。

私がまず始めたのは編成方針の再構築である。私は当時流行中のアメリカンスタイルの編成に便乗する気は全くなかった。「このスタイルは物珍しいだけで日本では定着しない。」という確信があった。その為に私が最初に始めたことは魅力あるパーソナリティの発掘、起用だった。幸い小林克也氏を始め文化放送時代に培った人脈が全面的に協力してくれた。大学後輩の栗山英樹・堀江ゆかり両君にも協力してもらった。また選曲方針も和製ロック偏重を転換し幅広く洋楽とJ-POPをバランス良くオンエアするようにした。

その結果、聴取率は次第に上向きはじめ、現在では首都圏のAM/FMラジオ局全体でトップを競うまでになった。当然営業の売り上げもプラス成長を続け、ラジオ業界の注目を集める存在に成長している。

今改めて私の40年以上にわたるラジオマン稼業を振り返ってみると、順風満帆ばかりとはいえ、激しい逆風の時期もあった。しかし、なんとかその難関を乗り越えてこれたのは、その事態の本質を見極め、逃げずに果敢に挑戦してきた結果だと思っている。また、その難関時に手を差し伸べてくれた友人たちの力も大きい。そして私は60代後半に差し掛かった今も新しい挑戦を続けたいと考えている。



ハワイ ワイキキにて
 さだまさし氏と取材中

◎ 幼稚園のころからの憧れの職業

— 教員になって4年・もっと自分を磨かなくては —



上尾市立原市小学校教諭

富山 めぐみ

2002(平成14)年理科卒

出会い……。人生の中で私たちは何人の人と出会い、ともに時間を過ごしていけるのか。その出会いは、いつしか忘れ去られる出会いもあるかもしれない。でも、一瞬に人生を変える出会いもある。どんな出会いも大切であり、その出会いを大事にしていきたいと私は思う。

教師の仕事は、たくさんの出会いをくれる。一年一年、瞳に期待をふくらませ、夢や希望に満ち溢れた子どもたちのまなざしを見ると、真剣に子ども達と向き合い、子ども達の幸せのため、少しでも力になれる出会いにしたいと私は思う。そんな大切な出会いをくれ、その人の人生に少しでも関わられるこの仕事は、言葉では言い表せないほど、やりがいのある仕事であり、最高の仕事だと私は思っている。

教師になりたいという気持ちは、幼稚園のころから抱いていた。子どもたちの成長のために、すこしでも役にたきたい、関わりたい。そう思っていた幼いころからの夢をかなえ、今私は、本当に幸せな毎日を送っている。現在、私は埼玉県内の小学校に勤務している。採用されて4年、3・5・6年担任を経て、今は1年担任として日々奮闘している。それぞれの学年の特色は多々あるが、なにより人の成長に関われることは本当に幸せである。子どもたちの幸せのために、頑張ってきたことは必ず子どもから返ってくる。その笑顔から得られるものは、言葉ではいいあらわせないほど幸せを感じる。しかし、人相手の仕事。現状は楽しいことばかりではない。いろいろな子どもたちがいる中で、マニュアルは通用しない。問題行動を繰り返す児童、学力遅滞の児童、人と関わるのが苦手な児童、親離れができず学校にこられない児童……。それぞれの子ども達の思いをうけとめ、その子どもに必要な支援を行いながら、子ど

もたちの成長のために過ごす毎日は、ストレスの連続でもある。それに加え、職場の人間関係。保護者との人間関係。人との出会いを喜びとしながらも、どうしてこんな出会いまで…と思わずにいられない出会いもある。しかし、どんな出会いも自分にとって大切な出会いであり、大切にしていきたいと思ったのは、大学時代の自分の生き方にあると思っている。

とにかく教師になるという夢をかなえたいと思い、一浪して入学した学芸大学。喜びと期待を胸に学大生となった私の大学時代は、とにかく多忙な日々だった。1・2年のころは、平日から、塾講師のバイトに励み、授業を受けたらとんぼ帰りの日々。その合間をぬって、大好きなバスケットの練習にも励んだ。忙しさにつぶされそうになることもあった。忙しいのなら、減らせばよかったのかもしれない。でも私は、全部に挑戦したかった。今やれることを全てやっておきたかった。だからこそ、一日一日全力で挑戦し続けようと思えた。とにかく何事にも全力で挑戦する。これが私のモットーであった。こんな無茶な私を支えてくれたのが、大学の友人たちとの出会いだった。今の私がいるのは、大学時代の友人との出会いにあるといっても過言ではないくらい、本当に大切な友人たちと出会うことができた。

1・2年のころは、実験三昧の理科選修の授業。週に2回の実験と必ずついてくるレポート。同じ選修の友人には、レポート作りや授業でさんざんお世話になった。それだけではない。授業以外でも悩みを相談しあったり、買い物にいたり、お茶したり…楽しい時間を過ごした。本当に居心地のよい友人で、冗談言ったり、真面目に語ったり…自分を素のままさせる友人だった。

授業やバイトが忙しくても、大好きなバスケのことは諦められず、ボールの音に誘われて入ってしまったサークル「レグルス」の仲間も最高の仲間だった。毎回の練習にいけなかった私でも、いつも温かく迎えてくれた。気兼ねなく接してくれる仲間。共に笑い、共に泣き、共に励ましあったサークルの仲間は今でも最高の仲間である。

2年の終わりから、研究室に入る。学大の中でも忙しく厳しい研究室であろうと思われる理科の研究室。そんな理科選修の中でも生物科の研究室の過酷さは半端ではない。とにかく、毎日毎日研究室で文献を読んだり、実験したり、発表したり忙しく厳しい毎日を過ごしていた。実験は大学の日課とは全く関係なく行われる。放課後夕方くらいまでならまだしも、21時22時…日付が変わることも多々あった。実験のために、泊り込むこともしばしば。結果がですに、先生から厳しい指導を受けることもあった。そんな中、研究室の仲間とはよく語り合った。研究室のこと、夢のこと、恋のこと…とにかくたくさん語り合った。研究室の仲間がいたから、なんとか厳しい研究にも挑戦し、無事卒業にいたれたと思っている。しかし、そんな厳しい日々にも耐え、一つのことに真剣に取り組んだ経験は、自信となり、今の厳しい毎日を耐える原動力となっている。

先生になるために、欠かせないのが教育実習。3年以降には、授業が倍増するのに加え、教育実習も行われる。私は、教育実習にも4校行った。小学校は、附属と公立小に。中学校と、養護学校にも免許取得のために行った。教育実習は、真剣勝負。そこでの子ども達との出会いは忘れられない。小学校では、前年度に学級崩壊に至ったクラスを受け持った。いろいろな形で自己主張する子ども達。そんな子ども達と向き合い、対話していくと、少しずつ変わっていく姿をみることができた。子ども達は、日々いろいろなことを教えてくれた。子ども達だけではない。先生方も本当に尊敬した。日々、子どもたちの成長のために、挑戦していらっしゃる先生方。先生方の子ども達に対する多数の引き出しは本当に勉強させていただいた。公立小でも、いろいろな子ども達に対する先生

の関わり方を学ばせていただいた。附属以上に多様な子ども達。学力差だけでなく、家庭、友人関係など様々な環境の差があり、いろいろな悩みを抱え学校にきている子ども達のため、日々頑張っている先生方の使命の深さ、大切さを本当に感じた。中学校や養護学校でも、それぞれの子どもの一生懸命に生きる姿に多くのことを学ばせていただいた。教育実習での出会いは、本当に一言では語りつくせないが、私の教員人生の原点といっても過言ではない。

大学時代私は、本当に全力で突っ走ってきた。好きなことをやり続け、できることを全てやりきってきた。全てに一生懸命挑戦していけば、できないことはなかった。そして、多くのことを学ぶことができた。そんな素晴らしい時間にこんな生き方ができたのは、学大のおかげだと私は思う。また、いろんなことに挑戦していく中で、たくさんのお会いももらった。多くのお会いの中で、私は、それぞれのお会いからたくさん学ばせていただいた。そして、その多くのお会いは、今なお私の支えとなっている。そんな全てのお会いに私は心から感謝し、今後も大切にしていきたいと思っている。

在校生のみなさんには、ぜひ今このときに、出会うことのできる全てのお会いを大切に、今このときを一生懸命に生きてほしい。それは、決して難しいことではなくて、自分ができることを今いる場所で挑戦していけばいい。資格をとるもよし、大切な友人をつくるもよし、思いっきり楽しい思い出をつくるもよし、大学生としての時間は、一生の中でかけがいのない時間になると思う。そして、自分の責任で自分を磨くためにたくさんのお会いをできる時間だと思う。そんな素敵な時間を有意義に使ってこそ、また一歩自分の夢に近づくことができるのではないかと私は思う。

最後に、子どもにとっての最大の教育環境は教師。教師自身を磨くことが子どもの成長につながる。今なお、私も日々挑戦の毎日を送っている。できるだけ多くの在学生在が自分の夢をかなえ、自分の使命を生きてほしいと私は思う。できれば、この教育の道とともに子どもたちのために、助け合えたら最高である。

◎ コーチング能力では負けないぞ

— 製造業の社員として教員養成大学出身者に出来ること —

FDK株式会社 総務人事部
片山 尚弘
1996(平成8)年B保体卒

昨年夏、私は企業の採用担当者として久しぶりに学芸大学の門をくぐる機会に恵まれた。というより、強引に押しかけたと言うほうが正しい……。

皆さんご存知のとおり、日本では「2007年問題」が大きな社会問題となり、企業の求人数はバブル期並み。就職は完全に売り手市場。にもかかわらず「NEET（ニート）」という、かっこいい名前の働く意欲がなく・教育や訓練も受けない若者が68万人もいるらしい。ますます求人倍率は増すばかり。今、企業の採用担当は必死だ。

『教員養成の大学を卒業しながら一般企業に就職した人間に何が出来るの?』という疑問をお持ちの方は大勢いる。また、私自身、教育系大学の学生が我々の企業を応募して面接に望む際（自分のことは棚におき）「大学で勉強してきた事が、企業でどのように生かせると思いますか?」といった趣旨の質問をする。

企業への就職：特に当社のようなメーカー（製造業）では、ほとんどが理系の研究者や技術者。または、製造に携わると認識している人が驚くほど多い。

総務・経理・営業・物流……。現実には私たちのような文系人間の働く場は企業内に非常に多い。そして、そういった部門であえて必要なスキルといえば、簡単な簿記の知識くらいだと私は思っている。それなら独学で勉強すれば充分通用する。よく言われることではあるが、学生時代は4年間。社会人生活は40年弱もある。基本は大事だが、社会に出てからの勉強時間の方がはるかに長い。

そんな中で、我々のような教育系大学出身者が企業内

で一番強みを発揮できる点は、コーチング能力ではないかと思う。社会人生活も10～15年もすると、後輩や部下が増え、いわゆる管理（マネージメント）能力が求められるてくる。そこで学生時代に学んだものが生きてると私は思っている。

「教育」は何も学校で行われているだけのものではない。企業内でも教育はいたるところに存在する。教育されるケースの方が多いくらい。そういった点でも東京学芸大学で学ぶ様々なことが社会に役立っている。

私事ではあるが、私のこれまでの社会人経験は少し変わっている。大学卒業後、教職にはつかず、卒業後の3年間は企業の運動部に所属した。仕事はほとんどしていない。

その後転職も経験し今の会社は5年目。それでも同時期入社10年目社員と比較しても引けを取らない程の頑張りが出来ていると思う。そういった今の自分があるのも、元々の運動部出身者としての負けん気もあるだろうが、小金井の4年間で得た様々な経験が生きているのだと思う。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さった東京学芸大学学生サービス課就職支援室の皆さんに心より感謝いたします。

そして何より、この寄稿が企業への就職を目指す学生の皆さんにとって、少しでも参考になるものとなれば幸いです。

音楽科から保険会社の営業に

— 日々、新しい自分再発見 —

第一生命相互会社
 特別営業主任 チームリーダー
尾崎 恵実
 2003(平成15)年G類音楽科卒

第一生命で営業をし始めて三年目になります。私が、
 教員にはならず一般企業に就職した理由はいたって単
 純なものでした。私は学芸大学のG類音楽科ピアノ専攻
 で四年間、大好きな音楽を学びました。幼稚園のときか
 ら音楽に興味を持ち、家族の協力のもとで、中・高一貫
 の音楽学校を卒業して大学でも音楽を学びました。そん
 な私が卒業後の進路を考えるにあたり、私の中で選択肢
 は二つありました。一つは、ずっと勉強していた音楽を
 生かし、音楽を教えていく仕事をしていくこと。もう一
 つは全く経験したことのない社会に出て、新しい自分を
 発見することでした。とても悩みましたが結局、今まで
 音楽の世界にいた私は、きちんと一度社会に出て自分磨
 きをすることに決めました。就職する際には、私は営業
 職と決めました。それは、せっかくやるなら大変でもや
 りがいのある仕事にチャレンジしよう、なるべく沢山の
 いろいろな人に出会って勉強しようと思ったからです。
 保険会社は第一生命しか受けませんでした。それ以外
 にも営業で二社内定をいただき、最終的に会社の雰囲気
 や女性の営業マンが主役で働いているという点で第一生
 命に決めました。

今は毎日があっという間です。私の組織は一人一人担
 当企業を与えられて毎日同じ企業に訪問するというスタ
 イルです。自分で一日のスケジュールを決めて計画的に
 活動しています。営業をしていて一番いいなって思うと
 ころは、頑張れば頑張った分だけ自分に戻ってくるこ
 とです。それは成績に関してもお給料に関してですが、
 頻繁に実感できるのでいい結果を残せたときや、いいお
 給料をいただいたときは、また次も頑張ろうって素直に
 思えます。逆に、怠けてしまったときにはもちろん数字

も出せないで反省してしまいます。でも、営業のいい
 ところは次に挽回できることです。

また所属しているオフィスの先輩後輩は、公私ともど
 もみんな仲がよく、苦しいときには励ましあって、楽し
 いときには一緒になって笑って、時には休日買い物を
 したりお茶をすることもあります。職場は女性がほとん
 どで、(もちろん本社には沢山の男性がおりますが)女
 子大のような雰囲気です。

就職活動をしている方あるいはこれからされる方で、
 本気で一生懸命働きたい、キャリアアップを目指したい
 と考えている方がいたら、絶対に私は営業という仕事
 をお勧めします。いっぱい稼ぎたいという方ももちろ
 んです！私はたまたま保険会社を選びましたが素直に良か
 ったと思っています。こんなに様々な方と出会って今
 まで経験したことのない世界で働くことができるなんて本
 当に素晴らしいことだと思います。若いときしか無理は出
 来ないので、出来るときに精一杯、悔いのないようにし
 ていただきたいです。

最後に、今後の私の目標を紹介させていただきます。
 営業の世界なので当たり前ですが毎月ノルマがありま
 す。それを達成したり、それ以上に自分の新記録を常に
 出せるような活動ができるようになりました。定期的に、
 豪華なホテルで表彰も受けられるようになりました。大
 きな会場で、二年目だろうが三年目だろうが結果を残せ
 ば、壇上上がりスポットライトを浴びることが出来ま
 す。それらの表彰の中で一番ハードルの高い、本社表彰、
 という舞台がありますが、今年はじめに初めて入賞しま
 した。それに次回も入賞すること。それが今のところの
 私の目標です。

◎ 「異端学生」 から「異端社員」へ

— 教育実習で会得した能力を武器に —



デザイナー

安藤 則浩

1971 (昭和46)年美術科卒

僕は、1971年春、東京学芸大学を卒業し、三洋電機のデザイン部（当時は意匠部）に入社した。「教員養成大学で一般企業を目指していた異端学生」から「教員養成大学出身という異端社員」になって、34年間企業内デザイナーとして商品の企画・デザインに携わってきた日々を振り返ってみる。

僕は東京藝術大学の工芸科（デザイン）を目指していた。現役の時はいくつか受験しなかったが、一浪の夏に父が他界し「これ以上の浪人と私立の美大への進学」は選択肢から外さなければならなくなった。当時の東京学芸大学には教養系はなく、純粋な教員養成大学だったこともあり「入学を迷った」が、父が亡くなる1ヶ月前に言った「第一志望合格も大切だけれど、自分の行った大学で一流の過ごし方をするの方がもっと価値があり素晴らしいことなんだ」という言葉が僕の背中をドンと押ししてくれた。

入学して間もなく、工芸（金工）研究室の独特の雰囲気には吸い寄せられていった。親方（先生）を中心に職人を目指す者達（学生達）がひたすら自分の技と感性を磨いている集団だった。その中心に金工の越智先生（1981年51歳で急逝）そして、宇賀神先生（2004年7月死去）がいらっちゃった。越智先生は鉄を鍛造した美しい曲面からなる作品ですでに有名な先生だった。越智先生は、東京学芸大学へ赴任される前に通産省工業技術院産業工芸試験所（以下「産工試」）に勤務されていた。当時の産工試は、日本の工業デザイン、プロダクトデザインの牽引的存在であった。産工試の発行していた「工芸ニュース」はデザイナーを志す者のバイブル

的存在だった。越智先生は工業デザインについても一流の指導者だった。その越智先生をサポートしていたのが赴任してきたばかりの若き宇賀神先生だった。活気に満ちた二人の先生の引力は、鍛金や彫金など工芸美術を目指す者だけでなく、現代彫刻や工業デザイン、プロダクトデザインを目指す学生も金工研究室に吸い寄せられていた。

3年生の頃から、大学での授業に加えて、金工室の先輩である北村正彦さんが勤めていた（株）寺島デザイン研究所でアルバイトをさせていただきながら「工業デザイン」を現場で勉強した。（寺島祥五郎先生亡き後、北村先輩が代表取締役をされている。）

大学では金工、木工、デザイン、彫刻、水彩（絵画）はもちろん統計、教育心理、教育実習とデザイナー志望の者には不用と思えるものも「広く」学んだ。教員養成という柱がある以上当然のカリキュラムなのだ。教職を目指さない「異端学生」だった僕は、「広く」手を抜くことなく一生懸命こなし続けた。

これが後に大変役に立つことになる。

団塊の世代は、就職戦線も激烈だった。東京学芸大学へは一般企業のデザイン部門の求人は皆無に近かった。そんな厳しい環境ではあったが、SANYOとSHARPの最終面接までたどりつけた。先に内定通知をくれたSANYOに入社することになった。

入社後、製造現場と販売現場での実習を経てデザインに配属されたのは8月末だった。

学芸大学出身という「異端社員」をデザイン部門の先輩達は「4年間詰襟を着て、生真面目な学生生活をしてき

た石部金吉」だろうと勝手に決めつけていた。デザイン部門の同期入社は僕以外全員美大のプロダクトデザインやインダストリアルデザイン、ビジュアルデザインの出身者だった。

まずぶつかったカルチャーショック？は、まだ国内では出始めたばかりだったマーカーを美大出身者達は「そつなく」使いこなし見栄えのするスケッチに仕上げていることである。彼らは時代の最先端の知識も持っている入社早々からイッパシのデザイナーの立ち居振る舞いをしていた。

そんな中で「大変だった」「苦労した」「気後れした」というような負の記憶は残っていない。繊細な「異端社員」はなぜ慌てることなくデザイン業務に携われたのか？それは、運良く最初に配属された事業部では、石油ストーブ、石油温風暖房機やキッチンセット等など「板金加工」を主体にした製品の占める割合が高かったのである。大きな工場での「板金加工」は初体験ではあったが、主体は金属である。金属は、学芸大学の金工研究室で、銅板や真鍮板あるいは鉄板をシャーリングで切断し、鋏で切り、焼鈍し、曲げたり、伸ばしたり、絞ったりしてきた。直接触り、自分の手で（鋸で）加工してきたので、金属を体で理解していた。したがって、意識しなくても金属(板金)の性質を生かすデザインができた。マーカーの使い方はたどたどしくても「本質」「勝負どころ」で美大出身者に負けることはなかった。合わせて、鉋の刃研ぎなど道具の手入れから始まり、鋸を引き、鉋を掛け、釘を打ち、木についても現物で勉強した経験は、デザインの専門教育を受けてきた選りすぐりの美大出身者と伍して戦える底力となっていた。技術部門や生産技術部門、営業企画、そして協力会社や素材メーカーなどの人達から「異端社員」は一目置かれるようになった。

1987年から立て続けに多くのデザイン賞を受賞した。
■ Gマークの部門別大賞(現在の金賞に当たる)、40年スーパーコレクション ■ ポパイのデザイン・オブ・ザ・イヤ一金賞(2年連続)、銅賞 ■ 日本デザインコミッティーのデザインフォーラム入選、企画展招待出品 ■ モノマガジンのスーパーグッズ・オブ・ザ・イヤ一金賞など他多数。

これらを受賞できた基礎には「異端学生」が東京学芸大学でしかできない「広く」そして「本物と対峙し」「体に沁みこませる」ことをしてきたからである。他の美大出とは違う教育を受けた「異端学生」がサナギを経て、ユニークで魅力的な「異端社員」となって空を飛べるようになったのである。

「異端社員」は、「教育実習」で会得した「人の心に響くプレゼンテーション」という強力な武器も身につけていた。社内外で自分の企画やデザインをプレゼンする時、リーダーとして部門をまとめていく時、教育実習の経験が大いに物を言った。

その後、空調・冷機デザイン部の部長、ホームアプライアンスカンパニー・デザインセンター所長を経て、デザイン部門が独立した(株)三洋デザインセンター取締役になった。2004年3月、「次のステージでもう一花咲かせたい」と定年まで2年余を残した時点でSANYOを離れた。(異端な？退職)

1997年4月～2002年3月まで非常勤講師として、工芸専攻の学生を主体に「デザインプロセス研究」という授業をした。デザイン研究室の学生諸君もたくさん来ていた。その中の何人かがプロダクトデザイナーとなって活躍してくれているのが僕の宝。また学芸大学で何かお手伝ができればと思っている。

「異端学生」から「異端社員」の後、現在は地元の大学・デザイン専門学校の非常勤講師を務める傍ら、中小企業の商品企画・デザインを手伝っている。これらに加えて自分の作品を創り始めるつもりだ。

これからも僕だけの「異端な道」を歩き続けたい。「異端」ってなぜか気持ちが良い。



輻射型暖房機

◎ 教員をめざす後輩に求めるもの

— 面接で見極められる資質 —

前小平市立小平第六小学校長

稲田 百合

1967(昭和42)年体育科

はじめに

「先生、今私は、先生だったらこのように指導しているかなと思ながら授業をすることがあります。」

教職に就いた教え子は、自分の小学校時代の授業がフラッシュバックするということです。こんなうれしい言葉を聞き、熱いものがこみ上げてきました。

私は、この3月で38年間の教職生活を無事に終えましたが、4月の子どもたちとの新しい出会いの時を38回迎えていたのだと改めて思います。4月は新しいドラマが始まるワクワク・ドキドキするときでした。子どもたちが、どんなに小さなことでもできるようになり、分かるようになることが教師の喜びであり、感動でした。日々繰り返されるそんな小さな積み重ねが子どもとのつながりを作っていました。子どもたちに感謝です。

それは、管理職になって直接学級を持たなくなったときも同じでした。悩みを抱えて落ち込んでいる私を救ってくれたのは、

「校長先生、元気がないね。大丈夫？」

という子どもの声かけでした。この一言に、どんな顔を子どもたちに向けていたのだろう、どんな姿勢でいたのだろうと、はっとして自分を取り戻しました。そして、心底、元気と勇気が湧いてきました。私は、どんな困難なときにも、子どもたちの笑顔のためにと考えることができるようになりました。

「子どもの魅力」ははかり知れないものがあります。これから教職に就く皆さんにもその魅力をたくさん感じてほしいと願っています。

1 教師に求められる資質

○私は何より教室のドアを開ける時の笑顔だと感じています。若い人のはつらつとした笑顔、経験が積まれれば積まれるほど優しさが詰まった笑顔、人柄からにじみ出る笑顔、子どもたちは教師のその笑顔が好きなのです。つまり、いつも笑顔を絶やさず指導ができる人間性が大事であるということです。

元気に子どもと遊ぶ先生。

子どもの良さを認め誉めることができる先生。

分かるように楽しく教えてくれる先生。

いつも見守ってくれ、励ましてくれる先生。

どの先生にも笑顔があります。だから、子どもたちは先生が好き。好きな先生の話はよく聞ける。そこに信頼関係ができる。できた信頼関係は家庭に地域に広がっていく。人間性に裏づけされた笑顔が大事です。

○次にコミュニケーション能力です。教師は、人と接する仕事ですからそこに「人間が好き」という基がなければコミュニケーションが成り立ちません。今、子どもたちの心がつかみにくく、見えにくくなっています。だからこそ、コミュニケーションがとれる関係ができるには、「今の君が好きだよ」という丸ごと抱きかかえることができる教師が必要だと感じています。さらに、今は、価値観が多様化しており、それが、子どもの保護者とのコミュニケーションを難しいものにしていきます。でも、「人間が好き」なら必ずコミュニケーションの道は拓け、人間関係をつくることができます。

○最後に、これからの教師にとって今まで以上に求められるものは、総合学習に求められるようなカリキュラムの構成力、それらを楽しく学ばせるアイデア、地域の人材をコーディネートする力など総合的な企画力であると考えています。今まで通りをなぞっていくのではなく、柔軟な対応、進取な取組など授業を自分で構成していく力を持つことが必要です。そうした教師の飽くなき探求が子どもの意欲を引き出し、学校を楽しい場にすると思っています。

2 人物重視の面接

これから教職を目指す皆さんはまず、教員採用試験を突破しなければならぬわけですが、年々「教師に求められる資質」を重視する傾向が見られます。

その背景には、いじめ、不登校、学級崩壊、特別な支援が必要な子への対応など現代の教育が抱える深刻な問題があり

ます。これらの問題への対応は学校力だけではなく、根は家庭、地域社会の教育力にも深く関わっています。こうした多くの問題を抱える子どもたちにとって、最も近い存在である教師の資質が、今まで以上に重要視されているということです。

こうした教師の資質は、経験を重ねることで学び、身に付いてくると言えますが、現実には教師になって即、その対応に迫られる事態が起こりうるのです。だれもが直面するかもしれない、このような教育現場でゆるぎない情熱と愛情をもって子どもたちと向き合える力があるかが問われています。

このようなペーパー試験では見ることができない人となり面接で見極めていくわけです。その際に注目される1つに、東京都の教員採用試験面接票にかなり大きな枠をとっている「社会活動等」という項目があります。ボランティア活動などの社会貢献的な活動を記入する欄です。どんな活動をしてきたかを聞いているのですが、活動内容の大小ではなく、社会貢献活動をするその気持ちや実践力が問われています。実際にボランティア活動をするには、まず、自分の意思があり、人とのかわりがあり、苦労や喜びもあり、そのことは、教育の中で実際に生かせる重要な視点です。

最近ではボランティア活動やNPO活動等の重要性の認知度が高まり、参加する人の数も増えてきています。学生も活発に活動している姿が見られます。

3 学校現場で関わる学生

東京学芸大学の学生が、実際に小平市でボランティア活動をしている事例の様子を紹介します。

○学生ボランティア制度

小平市では平成12年度より学生ボランティア制度を設け、市内の小・中学校の授業や部活動支援に活動してもらっています。東京学芸大学の学生は、毎年170名から180名の登録があり、そのうち約35%の学生は前年度からの継続です。学生の感想を紹介します。

- 小学生の子どもたちがこんなにかわいいと思いませんでした。ボランティアをして改めて小学校の教師になりたいと思いました。 (書道学科・3年)
- 移動教室の引率をさせていただいたのですが、児童や先生方と一緒に生活することができ、とても勉強になりました。本気で教師を目指しているので、1年間、まだまだたくさん経験をしたいと思います。

(音楽専修・4年)

- とても貴重な体験をさせていただきました。どうもありがとうございます。今年3月の6年生の卒業に際しては別れが辛くなる程、児童と接することができて良かったなと思っています。4月以降もできる範囲で活動していきたいので、どうぞよろしくお願いします。

(K類欧米学科・3年)

学生ボランティアは同じ学校で続けて活動することが多く、教育実習では分からなかった教師の仕事や子どもへの対応など、学生にとって実地の貴重な勉強になっています。教員採用試験の論文や面接ではこのボランティア活動で学んだことが生かされたことを多く聞いています。中には、校長から論文や面接の指導を受けた学生も大勢います。

○小平よさこいスクールダンスフェスティバル

各小学校をエリアとして地域ごとに活動している小平よさこいの活動に学芸大学のダンスサークルが様々な活動で協力してくれています。今年スクールダンスフェスティバルには、学生が企画運営を全面的に引き受ける等どんどん行動を起こしています。地域に自ら飛び込んでくる学生の積極的な行動力に驚いています。地域活動に若い力が加わり、地域の活性化に新しい息吹を感じています。

4 おわりに

教育庁報No.511 東京都議会定例会で次のような教育長見解が掲載されていました。

教員を目指す者にとって、学校現場において、子どもたちと直接接する様々な体験は非常に貴重なものであると考えている。今後は、採用選考の面接において、受験生が持参する「面接票」に、このような学校現場での様々な体験活動について記入することをさらに周知徹底し、その内容を考慮して面接に当たるなど採用に当たっての参考にしていく。

教師を目指す皆さんが、いろいろなことに挑戦し、自分の資質を高めていき、これからの教育に希望をもって進んでいくことを願っています。



歴史にふれあう、文化にふれ合う

— 附属図書館蔵の絵双六を復刻 —

東京学芸大学教育学部
人文社会科学系

黒石 陽子

本学附属図書館には、百点余りの絵双六のコレクションがある。江戸の終わりから明治にかけてのものが中心となっており、道中双六をはじめ、さまざまな分野のものが豊富に揃っているが、特に近年では教育に関する双六に重点をおいて収集がなされている。それらは現在図書館のホームページでも公開されており、全体を概観できるよになっている。

双六には二種類あり、一つは盤上双六または盤双六ともいわれるもので、囲碁や将棋、チェスのように盤の上にコマをおいて遊ぶものである。もう一つが絵双六といわれるもので、一枚の紙の上に絵が書いてあり、その上にコマをおいて遊ぶものである。本学図書館のコレクションは後者の絵双六の方である。

日本において絵双六が芸術的なものとして発展していったのは江戸時代の後期からであった。この時期には木版による印刷技術が最高水準に達し、錦絵という極彩色の木版画が作られるようになった。この技術を活かして絵双六も作られるようになり、優れた作品が作られるようになったのである。

この時期に到達した技術や、双六作りの発想は明治初期まで継承されていくが、明治中期以降になると、木版から石版印刷や活字組版印刷に変わっていった。ただしこれにより木版時代よりも大量印刷も可能になり、一般への普及が一層容易になり、広告機能も持つようになっていく。やがて少年少女雑誌の正月号の付録となって、全国各地に広く行き渡るようになっていった。

ここで江戸時代の絵双六のさまざまな分野について簡単に述べておこう。最初に「道中双六」である。道中双六とは名前の通り、旅の道中を双六にしたてたもので、ある地点からある地点までの移動をさいころの目に合わせてコマで進んでいく。これを廻り双六という。江戸時代の道中双六は東海道のもののが最も多く、振り出しは江

戸日本橋、上がりは京都だった。同じ廻り双六でも道中双六ほど遠い距離でないものには、「江戸の名所」双六もある。花見の頃は花の名所、江戸の食べ物屋の名所の双六もあった。

絵双六にはもう一つの形式である飛び双六がある。これは振り出しのところでさいころを振り、出た目の数について振り出しのところに書いてある指示にしたがってコマを置くというやり方である。本学附属図書館蔵の絵双六コレクションの中の飛び双六をあげてみると、百人一首を学習するのに効果の高い「百人一首双六帖」や長編読本『南総里見八犬伝』を題材とした「犬のさうし鶯梅双六」、『仮名手本忠臣蔵』に取材した「忠臣蔵出世双六」などがある。

次に明治時代の絵双六について述べていく。明治時代のものは基本的には江戸時代に作られた絵双六のパターンを全て継承していった。しかしそこに新たな時代の文物や、知識、また時代の求めているものがどんどん取り込まれ、次第に変化をしていく。また子供を対象とする意識が明らかに見られるようになり、教育という側面が明確な形で現れてきているのが明治期の絵双六の大きな特色である。先にも触れたが明治以降の絵双六は、広告としての機能も持つようになり、商店の品物の宣伝などとしても活用されるようになっていく。その意味では絵双六の持つ、メディアとしての機能を様々な角度から最大限に活かす姿勢が出てきたといえよう。

本学附属図書館のコレクションの中でこの時期のものとしては、子供の遊びを集めた廻り双六「新版春遊子宝双六」、子どもをしつける上で善悪をはっきりと分かるように具体的な事例を絵にして、側に善玉・悪玉を描いている飛び双六の「教育善悪子供双六」がある。また「小学校尋常科高等科修業寿語録」は明治二十四年に刊行されたもので、当時の尋常科、高等科のシステムがよ

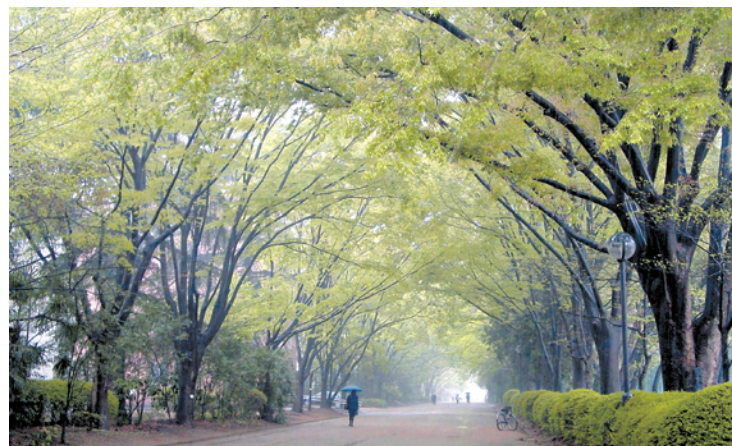


く分かるという点で貴重な資料といえる。「学校」という場所は寺子屋で学んできた親達にとって経験したことのない新しい教育機関だった。ましてや子供たちにとって学校生活には分からないこと不安なことが多々あったであろう。この絵双六で遊ぶことによって子どもなりに学校生活についての心構えを作ることが期待されたのではなかろうか。

一方明治期になり、雑誌が刊行されるようになると、付録としての絵双六が登場するようになった。本学図書館のコレクションの中には巖谷小波が出版を続けていた『少年文集』（明治三十一年）の付録であった「明治少年

双六」、婦人雑誌『婦人世界』（明治四十五年正月）の付録「二十四時家庭双六」、『少年文集』（明治四十三年正月）の付録「少年歴史地理双六」がある。いずれも廻り双六である。

今回、辟雍会、東京学芸大学、東京学芸大学出版会で、これらのコレクションの中から「小学校尋常科高等科修業寿語録」「二十四時家庭双六」の二つを復刻、刊行することになった。絵双六は実際に見て、遊んでみることで初めてその世界の深さと面白さが分かるものである。多くの方々に手にしていただき、その世界を味わっていただきたいと願っている。





走って、歩いて、飲んで、話して

— 2005武蔵野ふれ愛ラン&ウォーク —

実行委員長

渡辺 雅之

1) スポーツは人類を幸せにするかな?!

2005 武蔵野ふれ愛ラン&ウォークとはどんなイベントであったのか。ラン&ウォークだからマラソン系との早合点の向きにはまず深呼吸を。時系列的に見れば、まず、3つの講座から始まり、次にラン&ウォークとなり、これと同時に青空キャンパスが展開され、最後はランチョン寄席で締めくくりとなる。最初の3つの講座は、救急救命講座、伴走教室、ラン&ウォーククリニックで参加者はどれか一つを選ぶ。救急救命講座では、最近話題となりつつあるAEDという機械の実習を含む心停止時の対処を学ぶ。心停止時の電気ショックは法的に今誰でも可能となったので、運動場面では必須と言えよう。伴走教室とは、視覚障がい者（害の字を使いません）との伴走をどのように行うかの学習である。自らアイマスクをして当事者体験を通じて伴走者と走ってもらうことで多くの発見がある。ラン&ウォーククリニックとは、正しい歩き方や走り方、姿勢づくりとフォームづくり等の実践的講習であった。

このイベントの本体は、ラン&ウォークだけではない。ラン&ウォークの種目は、3km、5km、10kmと従来同様の競走の他に、5kmのタイム申告走やボランティア（運営、伴走）がある。5kmのタイム申告走とは、あらかじめ5kmの所要時間を申告してもらい、時計などを身につけずに走り、歩き、実際のタイムとの差を競うものである。遅い人でも優勝の可能性がある。ボランティアは説明を要すまい。しかし、参加種目としてこれを位置付け、イベントに不可欠な役割を前面に押し出した。するスポーツ、見るスポーツに続く、「支えるスポーツ」の学びと言える。これと同時に開催の青空キャンパスとは、けが等でラン&ウォークに参加出来ない、したくない人向けのイベントである。Tシャツにお好みの字を書いてのオリジナルTシャツづくりでは、書道科の石井先生が

教えてくれた。韓国新羅大学の崔（チェ）先生のブースでは、とっておきの韓国のお話が聞けた。声楽の嶋崎先生は、軽快なダンスを通じての身体ほぐしを、米山さんは木の実でのリースづくり実演を、粘土遊びコーナーでは大学生が子ども以上に盛り上がり、山名・古屋先生を驚かせ、と枚挙にいとまがない。

そしてランチョン寄席に入った。参加者はお弁当にお茶あるいはビールをもらい、ビニールシートに腰を下ろしてランチに、ステージ上では宴楽一門会真打ちの三遊亭楽松師匠が10km走って間もないながら高座をつとめた。生の落語を聞きながらのランチと言うことでランチョン寄席という。

閉会式で上位入賞者には賞状、救急救命講座等の参加者には修了証、ボランティアにはその証明書とがそれぞれ手渡されて閉幕となった。

2) 「ダ・ヴィンチ・コード」それとも「天使と悪魔」か!

ダン・ブラウンが書いたこの小説を読んでいない人にヒントを言えば、前者はキーストーンや聖杯が、後者は反物質とアンビグラムか。それぞれを巡るサスペンスである。さて、このイベントでは何がキーワードか。それは地域、子ども、障がい者、外国人とのスポーツによる交流である。足が速い人のためだけではない、見知らぬ人同士が交流出来る、楽しいスポーツイベントを目指した。ズバリ「触れ合い」そのもので、それを「ふれ愛」と表現した。さらに、スポーツそのものに加え、その周辺の学びも体験として取り入れ、スポーツしない人も参加出来るスポーツイベントを作った。スポーツ関係者は、自分がスポーツすることが好きなのでその前提で考える。だが、嫌いな人もいる。それでもこの空間で楽しんでもらえるような企画を考えた。生の落語を聞いたことのある人の方が珍しい時代だ。ボランティアが居なければスポーツイベントは成り立たない。

スポーツでは人との交流のハードルが意外と低い。ともに時を、空間を、活動を共有することがたやすい。早い遅いを抜かせば、それなりに楽しめるスポーツを通じ、「ふれ愛」を実践したい、が始点となった。

3) 11月23日は「ふれ愛」があったのか？

イベント開催日は、勤労感謝の日とした。参加状況は如何に。事前には赤字決算ばかりが憂慮されていたが、3kmのラン&ウォークには95名と最大のエントリーがあり、5kmの部に47名、最長の10kmの部には74名が挑戦した。また、5kmタイム申告走にも6名の参加申込があった。そして今回の目玉の1つがボランティアの種目化であり、一般ボランティア（インターネットによる公募）14名、本学学生ボランティア65名を得た。当日参加の地域の方を含むとおよそ350名規模のイベントとなった。異なる年齢やバックグラウンドの人々が救急救命講座で共に学び、ラン&ウォークし、ランチョン寄席で協賛のビールをただ飲みし、笑いとお天の下本当に皆が触れ合えたとは私は見た。他のスタッフも同意見、多くの学生ボランティアも賛同してくれていた。会場名は、「多目的ゾーン」だが「ふれ愛広場」への改称提案がなされた程だ。

人数だけではない。ある程度の人数と内容とその盛り上がりで、「ふれ愛」が確かにあったと、私は言いたい。

4) 1回目だから許されること許されないこと！

実行委員会の発足は昨年6月16日であった。学内外

の方々に実行委員をお願いしたものの、皆の都合が合わず、実行委員会はいつも少人数であった。参加申込もあまり捗らず、当初案の規模も下方修正をし、最終的には半分となった（700人体制から350人に）。駆け足のよう準備を進め、何とか間に合った。間に合わせた。だから不備も多い。

一例を挙げれば、登録ミス。女性なのに男性の方に。その逆も。大学までの案内がないために困ったという人。東門が開いておらず、難儀した人。机の不足。各種表示ボードがないために不明な案内、ラップチェックミス。タイム計測漏れ、表彰ミス等、いやはや本当に恥ずかしいことばかりだ。

5) 蒔いたネタが芽吹くためには？

果たしてこのイベントはその主旨が理解され、芽吹くのであろうか。ある程度の参加人数の問題は欠かせない。いろいろな人に、特に辟雍会会員や地域の人々の間での認知が高まるのか、事故なく運営が出来るのか。不安材料の方が多いが、私は案外いけると確信している。それは、ボランティアにNPO法人「いろはにほへと塾」も関わり、外部にも開かれた運営が可能だったからである。

懸念は今回大学教職員の参加が得られなかったことである。もちろんスタッフを除いてである。辟雍会幹事等の面々さえも参加して頂けなかったことをふまえ今後活かしたい、と考えている。



特別寄稿

フクロウとの交流で学んだもの



東京学芸大学学長 鷺山 恭彦

(1)

小学校5年の頃だったと思う。家の大きな椎の木に、昼間、静かに止まっている鳥を見つけた。木には洞穴があり、格好からフクロウだとすぐ判った。夕方になると飛び立ち、大きな木のてっぺんとまって「ホッホッ、ホッホッ」と鳴く。そしてあたりを睥睨して飛んでくる蝉やコガネ虫を捕まえている。秋にはいなくなった。図鑑を見たら、どうもこれは「フクロウ」ではなくて、「アオバズク」という種類らしいと判った。

アオバズクは、春から夏にかけて日本にやって来て子育てをし、冬は暖かいフィリピンやセレベス諸島で過ごすを書いてある。そんな遠い所からはるばる旅をして、我が家の椎の木にやって来るのかと思うと、ひとしおいとおしさが増した。

7月になると雛が3羽から5羽位かえる。これが「ホッホッ」とは鳴かないで、「ヒリヒリヒリー、ヒリヒリヒリー」と洞穴の中で鳴いている。観察しているところした新しい発見が次々にあった。「夏休みの研究」の宿題は、毎年一つ覚えのようにこのアオバズクをやったので、皆から「おい、フクロウ」などと呼ばれて、これが私のあだ名になった。

巣立ちの日、雛鳥が枝へ飛び移り損ね、地面に落ちてきた。捕まえると足でぎゅっと締められた。嘴も鋭いが、足の握力が雛鳥なのに既にひどく強い。これで獲物をムズと掴んだら逃げられないと思った。親鳥が心配して家の軒の物干し竿に来て騒ぐので、近くの木の枝に返したら、枝から枝に飛び移っていった。落ちたり、飛び損なったりの試行錯誤を繰り返しながら、飛ぶ力をつけていく様子がよくわかった。

夕方、あたりを見渡せる大きな木に親鳥がとまり、飛んでくる昆虫を狙い、傍らで雛鳥たちが並んで首を振りながら餌をねだっている。そして夕焼け、一番星、木々を渡る薫風——アオバズク親子のシルエットは、自然の豊かさを象徴する一編の風物詩だった。

その頃は昭和30年代になって、日本は高度経済成長期に入り始めていた。土木工事が盛んになり、深みや浅瀬があって岸辺の豊かな樹々を映していた家の前の川も、改修工事が始まって、川

沿いの大木は次々に切り倒され、コンクリート詰め of 堤防に変わっていった。洞穴のある椎の木は、風をまともに受けるようになったあおりで折れてしまった。営巣出来なくなってアオバズクも来なくなってしまった。魚とりをした川が味気ない川に変貌し、アオバズクが来なくなった無念の思いは深く心に残り、自然と人間の関係をいろいろ考える契機になった。

(2)

フクロウについては、古来、様々な言及がある。一番有名なのは「ミネルヴァのフクロウ」という言葉だろう。「ミネルヴァのフクロウは、迫り来る黄昏れを待って初めて飛び始める」というヘーゲルの『法哲学』の一節から一層有名になった。

「哲学がその灰色を灰色と描き出すとき、生の姿はすでに年老いている。そして灰色を灰色に描き出すことによって、生の姿は若返らされることなく、ただ認識されるだけである」という文章の後に、「ミネルヴァのフクロウは……」というこの言葉が続く。

真の認識は、事柄の矛盾が次第に明らかになる時節の到来を待って、つまり「迫り来る黄昏れ」を待って初めて獲得できるのだ、とヘーゲルは考え、それを飛び立つフクロウに喩えたのだ。

21世紀初頭、私たちの生の姿もヘーゲルのこの指摘に似て、旧世紀の枠組みを引きづったまま「老いている」といえようか。世界を刷新する新たな認識が求められている。教育の領域においても然りであって、私たちひとりひとりがミネルヴァのフクロウのように、新しい認識を求めて飛び立つことが求められているのだろう。

「ミネルヴァ」はローマ流のいい方で、これはギリシャの女神「アテーナ」のことを指している。だから「ミネルヴァのフクロウ」は、「アテーナのフクロウ」という意味である。アテーナ女神は、ゼウスの頭蓋から武装した姿で生まれたといわれ、兜をかぶり、手には槍と盾を持ったりりしい姿で、正義と知略を司る。フクロウはこのアテーナ女神の使いである。ギリシャの壺

絵やコインには、女神アテナとフクロウの図柄がある。ギリシャの人々は、フクロウの思慮深そうな表情と落ち着きが知恵の女神の添動物に相応しい、と思ったのだろう。

「アテナにフクロウを送るのは、ニューカッスルに石炭を送るようなものだ」という諺があるという。無駄なことをする喩えだというが、しかし、森や林はほとんどなく、石ころだらけの印象の強いギリシャで、フクロウはどのように住んでいるのだろうか。諺になるくらいだからそれだけ多くのフクロウがいるということだが、木も洞穴もありそうもない。アテナを訪れた時に、どんな種類のフクロウが、どのような所に住み、どんな生態系で子育てするのだろうか、と思った。

ギリシャの哲学者といえば、ソクラテス、プラトン、アリストテレスだが、確かにヘーゲルの指摘通り、彼らはギリシャのポリス世界に凋落の蔭が忍び寄り始めた時期に、哲学的思索を始めている。アリストテレスなどは完全にヘレニズム時代である。世界と自分がまるやかに一体化している時には哲学は必要とされないのだろう。哲学とは、不幸な意識の産物であり、幸福欲に導かれるものなのだ。

ドイツ中世の民衆本に「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」というのがある。この「オイレンシュピーゲル」は、オイレンはフクロウで、シュピーゲルは鏡だから、直訳すれば何と「フクロウ鏡」である、ということにある時気付いてびっくりした。ティル・オイレンシュピーゲルは道化師である。道化師として生きたティルのような人間こそ、実は、広い知識と批評精神と真の知恵を持ち、同時に出来事の語り手、人間の歴史を映す鏡なのだ、そう作者はいいたいのだろう。ここでもフクロウは、叡智と結びつけられている。オイレンシュピーゲル＝フクロウ鏡。成る程、主人公をこのように命名して、楽しさと面白さと共に、物語や小説というものの本質的意味を問わず語りに表現して、その命名に感心した。

これらはいずれも知恵の化身としてフクロウを語っているが、しかしある時「ハムレット」を読んでいたら、気の狂ったオフィリアがハムレットに向かって言うセリフ「フクロウはパン屋の娘ですって」という言葉に出逢って、「何だこれは」と思ったことがある。全く関係ない二つを結びつけるのは、彼女の狂気のせいだ位に読んでいたが、しかし何かもう一つじっくりこない。土俗的なエピソードと絡んだ背景がありそうだ。調べてみたい衝動にかられるが、まだ実現していない。

(3)

福本和夫に『フクロウ ― 私の探泉記 ―』という本がある。福本和夫？、さてどこかで聞いたことのある名前だと思い、まさかと思ったが、やはり戦前の革命理論「福本イズム」で有名な福本和夫その人だったのには驚いた。そんな片鱗など、どこ

も感じさせないフクロウの本である。

しかし流石にその中にリヒアルト・ゾルゲの話が出てくる。最近、篠田正浩監督の映画『ゾルゲ』でその生涯が描かれて評判となった、そのゾルゲである。彼もふくろうを飼っていたという。ソ連と日本を股にかけて厳しい情報戦をやったゾルゲだが、彼の心をもの静かなふくろうのたたずまいが癒したのだろうか。

ハンガリーの思想家にルカーチという人がいる。彼の芸術理論を勉強していて、何かの折に資料を調べていたら、1922年にドイツのイルメナウで開かれた「第一回マルクス主義週間」の記事を見つけた。この集会は、批判理論として戦後大きな潮流をなした「フランクフルト学派」の源流と位置づけられるものだが、出席者の写真が残っており、その古ぼけた写真を見て驚いた。何とそこにルカーチと共に、ゾルゲも福本和夫も写っているではないか。若き日、ルカーチもゾルゲも福本和夫も、このイルメナウで出会っていたのである。ゾルゲは学者でもあったのである。

イルメナウは、ゲーテが「峠の上に憩いあり」という有名な詩を作ったキッケルハーンという山の登り口として知られている町である。しかし20世紀の激動は、この三人に憩いを与えはしなかった。

日本に帰国した福本和夫は、戦争に反対したために獄中14年を送ることになる。ゾルゲも運命の糸にあやつられるように上海、そして東京にやってくる。日本のドイツ大使館に勤め、日本軍が北進でなく南進する情報をソ連に伝え、スパイの咎で尾崎秀美と共に1944年、絞首刑になる。国際的には反ファシズムの闘士として知られている。ルカーチはナチスに追われてソ連に亡命したが、戦後、ハンガリーに帰国したのち民主化を掲げたナジ内閣の文相となり、ソ連軍の侵攻を受け、ルーマニアに拉致拘留された。1956年のいわゆるハンガリー事件の立役者の一人になる。銃殺刑を免れ、帰国後は美学と存在論の執筆に没頭した。

戦争と革命の20世紀の激動の中で、3人は数奇な運命をたどったのである。この3人の出會いにしばし感慨にふけたが、フクロウについて言えば、ルカーチがフクロウが好きだったという話は聞いていない。

(4)

遠くから眺めるだけだったフクロウを、実は15年程前にひよんなことで実際に飼うことになった。郷里で理髪店をやっている同級生が、巢から落ちていたフクロウの雛を持ち込まれて首尾良く育て上げたのだが、獐猛で飼いきれなくなったというのである。山に放すしかないというのだが、自然に戻しても一度人間に育てられたものは生きてはいけぬ。それで決心して



引き受けたのである。

理髪店の鏡の間でのびのび育った様子なので、籠にいれるのは可愛そうだと思い、自室に放し飼いにした。マリをボンと弾ませると、さっと飛んで来て、あやまたず足で捉える。昼は静かに本箱の上に止まっている。糞はぼぼ一定にそこにするので、これは少し助かった。夜は寝ていると、顔に風が当たる。さあっと舞ったり、急降下で舞い降りたり、ものを掴んだり、一晩中活発だった。肉をやると糞が臭くなるので、餌はドックフードをやることにした。

田舎に帰るとき、毎回連れて帰るのも大変なので、東京の部屋に置いていったりすると、帰った時に大変だった。部屋はもう自分の縄張りになっていて、入ってきた私を奇声を発して威嚇する。目でも合おうものなら、ランランと擽猛な眼差しになり、さっと飛んで、こちらを襲ってくるではないか。鋭い爪で一度額を切られたことがあった。縄張りに闖入してきた者として、容赦なく攻撃する。鳴き声から「ホースケ」と名付けたが、餌い主を襲うなどは、阿呆の「ホースケ」以外の何者でもない。利口そうな顔をしているが、何だこの馬鹿者かと思うが、ところが当方が目を合わさず、知らん顔をしてずっと部屋に入って、机に座って本を読んでいると、初めは警戒声を出すのだが、やがてちょこちょこ横にやってくる。擽猛心が過ぎると、後は心はきわめて柔和といった感じである。ただ、飼われても、猛禽類のアイデンティティーを失わないのは流石、というべきなのだろう。

蛇の道はヘビで、ドックフードを買いによく行く店で、ある時、奥の方に鳥のコーナーがあるのに気づき入ってみると、外国からの鳥がいろいろある。行く度に鳥を眺めていて、ご主人と話すようになった。鷹匠だった。近くのお宅に鷹がいるというので伺うと、外国からのものだが、立派な鷹がいて、間近に見るその雄姿に感動した。いろいろ写真を見せて頂いた中に、フクロウの写真があり、7~8羽のフクロウがまるで鈴なりのように並んでいる。驚いて、何ですか、これはと聞くと、フクロウは卵を孵す時の温度と湿度が判ったので、孵卵器で容易に孵化できるようになったという。1つ卵を産むごとに取ると、またすぐ産み、そうすると普通の倍の卵を産むので、それを孵卵器にいれて孵したのだという。鷹や鷲もそうして増やしたいのだが、温度と湿度、特に湿度が不明でまだ人口繁殖できないとも語っていた。

「鷹狩りに連れて行ってあげましょうか」といわれた。関心はあったが、どうもあの綺麗なキジやヤマドリが鷹に捕まって血まみれになるのを見るのもいい気分ではないので、お断りした。女優の小川真由美と知り合いで、「彼女もふくろうを飼っている。あれは雄だが、鷲山さんのは雌のようだから、つがわせて卵を産ませると面白い」といわれた。これも気後れして、実現しな

かった。

(5)

田舎から上京する際に、母とホースケを乗せて東名高速を走っていたことがあった。走らせ過ぎたらしく、スピード違反で停止を命ぜられた。窓から車を覗き込んだ警官がギョッとして立ちすくんだ。若者のスピード違反かと思ったら、運転していたのは髪の白くなったおじさんで、横には90歳のもはやミイラ寸前といった母が座っており、その後ろでフクロウが目むいて奇声をあげたからである。「おっ、お急ぎでしたか」と警官は一瞬たじろいて、やっと声を出した。「そうですか。学芸大にお勤めですか。警察学校に行く時は、大学の前を通過して、よくお世話になっています」と余り関係のないことを言われながら、切符を切られた。「お気をつけて」と解放されたのだが、後を振り返って見た母が「あれ、二人で敬礼しているよ」。パトカーにサイレン付きで追われた当方も驚いたが、警官の方も驚いたのだろう。

ウィーンに半年行くことになり、まさかホースケを連れて行くわけにもいかないので同級生に戻して、その間は飼ってもらうことにした。帰国して会いに行ったら、学校の帰りの子供たちがいつも眺めていたが、入り口をいじったせいなのか、逃げてしまったという。がっかりした。しかしどこかに少しほっとした気持ちもあった。猛禽類を飼うのは、実際には大変なことなのである。

あれからもう10年近くが経つ。ときどきホースケのことを思い出す。先日、秘書室にファックスが入り、内容を見た秘書嬢が仰天した。「ベンガルワシミミズクのいいのがいます。学長室にびびたりと思えますのでさしあげます」という内容だったからである。ただでさえ忙しい仕事の上に、毎日ネズミなぞを冷蔵庫から切ってやる仕事に加わるのかと、責任感の強い彼女は狼狽したらしい。花鳥園でフクロウも飼育している方からのファックスで、以前にお会いした折、フクロウの話ではずんだことがあり、それで思いつかれたのである。電話をすると「ベンガルワシミミズクは、物静かでいいですよ。あんな神経質で擽猛な日本フクロウを飼ったのだから、何ということはないでしょう」といわれる。

やっぱりフクロウとは縁があるのかなあと思い、こういう話を聞くと、胸がときめいてくる。しかし飼う決心がつかないのは、飼う大変さをよく知っているからである。大学では効率化係数などを掛けられて毎年7000万円ずつ減られる。いくら考えても人員削減しか対策はないのかと思うと、気が滅入る。ミネルヴァのフクロウならめベンガルのワシミミズクがいい知恵を授けてくれるのなら、すぐにも飼い始めるのだが……

音楽にふれあう ― ホームカミングデー音楽祭 ―

“学芸フィルハルモニカー演奏会” ― NHK 交響楽団ホルン奏者今井仁氏を迎えて ―

辟雍会事業部では、毎年ホームカミングデーで行事を企画しておりますが、2005年は学生にも会員が増えていることから、初めて小金井祭実行委員会と協力して、春先より数回の連絡会議を経て、「東京学芸大学第7回ホームカミングデー記念 辟雍会音楽祭」のタイトルで企画され小金井祭期間中に行いました。

当日は11月5日（土）午後3時より、大学のホームカミングデー行事のメインとして芸術館ホールで行われました。学芸フィルハルモニカーは、本学の学生、卒業生、教員が母体となったオーケストラで、指揮は本学音楽・演劇講座助教授の山本訓久さんがあたりました。今回特別ゲストの今井仁さんは本学D類音楽学科の卒業生で日本の一級オーケストラNHK交響楽団というプロの一線で活躍している若手のホープです。コンサートはモーツァルトの《皇帝のティトゥスの悲》序曲で始まり、ホルン協奏曲ではホルンの音色とすてきな音楽に聴き入りました。

また後半には、特別企画として「みんなで歌、奏でよう！秋の歌」と題して山内雅弘（同講座助教授 本年度

朝日作曲賞の吹奏楽・合唱最優秀賞ダブル賞者）さん編曲による《オーケストラと合唱のためのノスタルジック・メドレー日本の秋》と《東京学芸大学学生歌「若草燃ゆる」》をステージのオーケストラとフロアの参加者が一体となって歌いました。当日は秋晴れの一日で、キャンパスの秋を散策しながら芸術館に訪れる聴衆の姿も見られました。

また当日ユニセフの募金箱もおかれて、聴衆から寄せられた寄付金は世界の恵まれない子ども達や教育環境の整備の一助となりました。

演奏会終了後多くの方から好意的な感想が寄せられました。その中で《東京学芸大学学生歌「若草燃ゆる」》を是非CDで作成して欲しいという声が複数ありました。この意見を事業部で検討し、指揮者の山本さん、編曲者の山内さんと相談しながら、「合唱付きオーケストラ版」、「オーケストラ版」を是非来年度予算化して作成し、入学時や卒業時の他、大学の紹介DVDとして販売したいと考えています。

（事業部長 筒石賢昭）



富山支部

Uターンのススメ

富山大学人間発達科学部附属小学校 教諭
草野 剛
1990(平成2)年A類国語科卒

平成2年3月、卒業式を終えて4年間住み慣れた東京を後に、郷里の富山へ戻った。東京在住の仲間が見送ってくれた上野駅での別れは、雪こそ降っていなかったが、まさに「なごり雪」の歌詞のようであった。つきあってきた彼女が、大宮まで一緒に着いてきてくれたことも、今となっては懐かしい思い出である。

もともと、富山へ戻るつもりで、大学の間だけの期限付きの東京生活であった。しかし、その4年間で得たものは計り知れない。社会に出る直前の大切な時期を、東京という街で、同じように全国各地から集まった仲間とともに過ごす中で、視野を広げ、自分の価値観が形作られていったように思う。

当時、「地元で教員になるのなら地元の大学がいい」という風潮が見られた。自宅から通えば住居費はかからず、勤めてからも周りに同窓生が多いので助け合うこともできるからであろう。地元に戻って勤めてみると、確かに地元大学の出身者は多い。しかし職場で大学の話題になることは少ないので、肩身の狭い思いをすることは全くなかった。逆に、「東京ではどうだった？」などと尋ねられて話す時は、誇らしささえ感じることもあった。

また、採用に関しても、富山県の場合、教員採用試験に地元大学が有利であるという印象はほとんど感じられない。地方の教員採用が厳しい現状では、地元大学の学生だからということではなく、あくまでもその人の能力や人間性を重視しているのであろう。そうだとすると、学芸大学のように東京の大学を出た者が地元で就職する方が、地元だけで過ごしてきた人に比べると断然有利である。東京在住の人には申し訳ないが、他の地域で一人暮らしを経験した人は、ずっと親元で育った人と比べると、やはり視野や社会経験が違ふ。採用する側にすれば、そんな経験豊富な人を採用したいのは明らかなことであろう。

確かに、東京など都市部は地方に比べて便利で情報も多く、求めさえすればいろいろなものが入りやすい。そ

れはそれで良い面はある。しかし、同時に自分の欲しくない情報や誘惑が入ってくることも多い。また、昔は東京が最先端の情報の発信地であることが多かったが、現代ではインターネットで情報を受信したり発信したりできるので、どこにいても大きな違いはない。そう考えると、東京にいなければならない理由は少なくなってくる。都会の利便さばかりに目を奪われるのではなく、生まれ育った故郷のある地方出身者は、ぜひ一度地元に戻ってみるといい。東京での暮らしと比べることで、地元の良さが再確認できる。「地方の時代」と言われて久しいが、生まれ育った場所と異なる地域で暮らしてみても、そこに一つのポイントを置いた上で地元に戻るような、視野を広げる生き方が、これからの時代には大切なのではないだろうか。

また、地方大学はどうしても近隣地域からの学生が多く、卒業後のつながりも限られた地域だけになることが多いのである。それに比べて学芸大学の卒業生は日本全国にネットワークをもっている。他の地域の研究会の様子や資料、授業交流など、仲間を通じて全国の情報を手に入れることができる。また、出張や旅行に出かけた先で昔の仲間に出会うのも大きな楽しみである。そんなネットワークができることが、学芸大学に在籍することの大きなメリットであろう。クラスやサークルやアルバイトなど、仲間とのネットワークをつくる機会はたくさんある。ちなみに私が在籍した平成2年卒の2組は、毎年とは言えないまでも、卒業してからも2、3年に一度はあちらこちらでクラス会を開いて集まっており、一昨年は富山でも行った。久しぶりに合う全国の仲間、限られた時間ではあるが富山の自然のすばらしさや食べ物のおいしさを伝えられたのではないかと思っている。

そんなネットワークをより強化するためにも、全国同窓会「辟雍会」の一層の充実と発展を同窓生の一人として願っている。学芸大学を卒業または在学中の地方出身の皆さん、地元に戻れば、そのネットワークの、仲間の、そして地元のすばらしさも再発見できますよ。

石川支部

14年の歴史を刻んで

石川県支部長

若林 勝

1968(昭和43)年甲類体育科卒

東京学芸大学石川県人会が発足したのは平成4年でした。

小生が学芸大学を卒業し石川県の教員として採用されたのは昭和43年4月ですが、当時は教職員名簿に出身大学や採用年度が記載されていました。したがって教職員に関しては同窓の方の氏名は把握していましたが、たしか10名にも満たない人数だったと記憶しています。

数年経ってそのうちの一人北口公男先生から声をかけられ、「一度集まって一杯飲もうや。」というのが、あるいはスタートラインかもわかりません。

そのうち学芸大学卒の教員が多くなり、いたる所で「集まりたいね。」という声を聞くようになりました。それでは、ということで、同じ体育科卒の小平先生を中心とした若手が情報を収集し、名簿づくりをし、懇親会を持ったのが平成4年2月だったと思います。

その第1回の集まりで、「継続しよう」「芋づる式に会員を増やそう」ということで、北口公男先生を会長に正式に会がスタートし、今日に至りました。

その後、定例の会以外での交流も広まり、会員の輪と和はますます広がり充実しつつあります。

学芸大学ということから、教員が多いのですが、他の職業に就いている人もかなり居ます。たとえば、会社員、市や県の職員、警察官、音楽家、スーパー経営者、ボランティア等々。

例えば、石川県では、ピュアキッズスクールといって女性警察官をゲストティーチャーとして学校に招き指導してもらう企画がありますが、会員の勤務する学校へ会員の警察官がやって来て学芸大コンピで指導するということが、たびたびあります。

市役所を訪れ同窓の担当にウインクということもありました。ウインクが功を奏したと信じています。

石川の音楽を牽引している副会長が指揮するオーケストラの演奏会で人一倍大きな拍手やアンコールを喚くという

サクラ(?)を演じるということもあります。

ドライブの途中でスーパーを経営する仲間の所へ立ち寄り飲料を調達ということも行われているようです。

読み聞かせのボランティアの中に会員がいて、読み聞かせより二人の思い出話に、より時間をかけるということもありました。

プロ野球のドラフト一位の選手を育てた、高校野球の監督もいます。「ベ이스ターズの〇〇選手を育てたのは、俺の後輩だぞ。」と自慢する輩(小生のこと)もいます。この監督はわたしたちの定例会がある時は練習をコーチに任せて、毎回奥能登から出かけてきてくれます。

石川県は御存知のように南北に長い県で、加賀の端から奥能登まではかなりの距離ですが、毎回新しい顔を加えながら各地から集まってくれることはうれしい限りです。そして卒業間もない若い会員も出席してくれることも、会の将来のことを考えれば喜ばしいことだと思います。

今後の会のあり方として、まず気楽に参加できる雰囲気大切にしたいと思います。教員が多いと、とかく話題が学校のことに偏りがちになり、他の職業の人はしらけるといふ懸念がありますが、今のところそれもなく、むしろ教員以外の参加が増えているくらいですから、心配ないようです。

〇監督率いるチームが甲子園に出場することがあれば、幟を押し立て応援にかけつけることも会員の夢です。

先年、富山県の「獅子の会」から招待をいただき幹事長と出席しましたが、今度はこちらが招待し、さらにその他の支部との交流もできれば、と考えています。そのためにも代表者会にはできるかぎり出席したいと考えています。

辟雍会一番の新参支部、今後ともご指導ご支援よろしくお祈りします。

■ 家庭科同窓会（さゆり会）

■ 会長 中橋 美智子

家庭科の同窓会（さゆり会）の紹介をさせていただきます。

家庭科の同窓会は、昭和30年私の学生時代に第1回卒業生成田容子氏（初代さゆり会会長、当時青山中学校勤務）との語らいの中で、学科の同窓会（たての繋がり）の必要性が話し合われ、スタートしたのが本学科の同窓会の始まりといえましょう。その折から私の定年退職時まで、45年近く同窓会事務局の仕事をさせていただきました。当時、同窓会名簿を作成するにも一仕事で、ガリ版と原紙で一字一字鉄筆を使って謄写版で刷り上げ、今思うと大変な作業でした。あの頃のことを懐かしく思い出されます。

昭和37年家庭科館が落成し、初代学科主任斉藤文雄先生（昭和35年定年退官）をお招きし学科の同窓会に「さゆり会」の名称をつけていただきました。本年度さゆり会創設50周年を迎えることになりました。

同窓会創設当時は、世田谷分校の開学祭に併せて年に

1回、学生と卒業生との交流の場の機会として現場の話や意見交換など、充実した懇談会を開催しておりました。その後も同窓会名簿の作成、教官定年退官記念祝賀会、叙勲祝賀会、新棟落成記念など、教官・卒業生・在校生が一同揃って同窓生の集まりの場として今日に至っております。私たちの同窓会の特徴は、教官と卒業生の集まりにとどまらず、学生達も共に語りあう場であるということです。

最近ではホームカミングデーに合わせ、昨年11月にはさゆり会交流会を開催し、楽しいひと時をもちました。多くの卒業生と学生そして旧教官・教官の楽しい集いの場のあること、そしてその絆の強いことは、私としても大きな誇りでもあります。

現在、さゆり会事務局（生活科学講座内）では、卒業生の再就職希望者への就職紹介など卒業後も頼れる同窓会として役立っております。

■ 音楽科同窓会について


■ 会長 井口 太

音楽科というのが長い間、通称として現在の教育系A・B類の音楽選修、音楽専攻をさし、かつてはD類音楽専攻を含めてきましたが、もうずいぶん前から、学部には教養系G類音楽専攻を加え、会則にあるように同大学院修了生も加えた大きな世帯となっています。加えて、「その前身の各師範学校音楽専攻卒業生」も会員であると会則に記載される同窓会です。客員には、「学芸大学音楽科教官、並びに旧教官」が位置付いています。つまり、私どもでは卒業ないし修了、在籍の実績をもって全員を会員としていますので、辟雍会の構成とは異なりますが結果として学内で一番大きな会員規模の同窓会であると自負しています。現在2,800名余りの会員情報を有し、いずれも同窓会報を受け取って頂いています。会の愛称ともなっている「つわぶき」は派手ではないけれど、花の少ない時にひっそりと、しかし力強く花開くとして元会長の小林光雄氏の提案を受けて、今の会報のタ

イトルになっています。

本同窓会は音楽の専門集団として、学科の教員の協力を得て、学内では辟雍会の設立行事にいくつかの演奏をお贈りしたこと、2005年度の総会では同窓のNHK交響楽団のホルン奏者を招いてホルン協奏曲他を発表するなど、様々な機会に活躍のチャンスを受けております。これらは、在学生や同窓の会員、中でも本学に勤務する教員の共同に依っています。また、特筆すべきこととして、音楽教育の現場実践の指導的なりソースが、この同窓会には豊富に備わっていると言うことを指摘しておきたいと思います。全国各地の音楽教育研究会や学会において、本学卒業生が助言や指導に当たり、また、優れた授業実践を発表されたりしています。今後とも優れた実践者を送り出す同窓会に成長したいと思っております。注目して下さい！

生物科同窓会


 真山 茂樹

私たちの同窓会は、生物、生命科学関係の教室及び講座を卒業、修了した学部生、院生から成る組織で、1期生から53期生まで2071人が会員として登録されています(平成17年12月現在)。会費は4年分一括払いで2500円です。生物科同窓会が行っている主な事業には以下の事柄があります。


- 【1】公開講演会と総会：毎年、大学主催のホームカミングデーに開催しています。公開講演会では退官された先生のその後の研究の話、同窓生の学校での生物教育研究の話、大学新任教員の話などが毎回のテーマです。平成17年度は10月に生命科学分野に新任された三田雅敏先生にヒトデの卵に関する講演をしていただきました。
- 【2】生物科同窓会ニュース：毎年発行し全会員に配布しています。平成17年度はA4サイズで6頁の内容でした。同窓会ニュースでは講演会に参加した会員の感想文、各研究室で行われている研究室同窓会の記

事、紙面同窓会と銘打った各期の同窓生の近況報告、大学の近況報告を毎号に掲載しています。また、3年に一度、卒業生の就職状況を伝えると共に、教員の退職や逝去時には特集を組んでいます。本年は2月に逝去された高城忠先生の特集でした。

- 【3】会員名簿：4年に1度発行し希望者に配布しています。
- 【4】ホームページ：講演会、総会の日時を広報するだけでなく、大学内で開催される卒業研究発表会や修士論文発表会の日程やプログラムなどの速報を紹介しています。また、同窓会ニュースは最新号から過去のものまで、ホームページ上からも読むことができます。

ホームページへのURLは <http://www.ugakugei.ac.jp/biology/seibutsuka/dosokai.htm> ですが、Yahoo、Googleなどの検索サイトから「生物科同窓会」と入力すれば、ほとんどの検索サイトでトップ表示されますので、簡単に辿り着くことができます。

書道科同窓会・硯心会 (けんしんかい)


 加藤 泰弘

本学書道専攻卒業生の相互の親睦と書道の研究発展を目的に組織されたのが「硯心会」(けんしんかい)です。現在の中等教育教員養成課程(B類)書道専攻の前身は、昭和27年に全国に先駆けて設置された特別教科教員養成課程書道専攻です。設置当時の編入生が、昭和28年3月に第1期生として卒業の時この会が組織されたと聞いています。それ以来、この春で第54期生が卒業し、硯心会会員は約1600名になります。各期ごとには連絡役である理事が置かれ、毎年3月に理事会を開催して、会の運営や事業計画等について意見を交換しています。また、会員の動向調査も各期理事を通して行っており、小金井祭時に在学生在が芸術館で開催する書道専攻展や卒業制作展等の案内に役立てたりしています。

この「硯心会」の企画運営で毎年、銀座で同窓会書展である「硯心会書展」を開催し、今年で第25回展とな

ります。また、卒業生の多くが全国各地で書写・書道教育に携わっており、その児童・生徒の作品を集めて「学芸書道全国展」を企画運営し、今年は第30回記念展を開催する予定です。全国から約7000点程の作品が全国から集まり、全作品を芸術館で展示するなど、書写書道の発展に貢献しています。



学芸の森を育てる

東京学芸大学キャンパスには沢山の木々が植えられています。
これらの木々は40～50年の歳月を経て、今日のように成長しました。
しかし、その間で枯れたり衰えたりしている木々も少なくはありません。
これからの時代のキャンパス内の自然環境を考え、
より豊かなものにする・・・
それが学芸の森プロジェクトです。



自然館屋上から臨む本部 1968年



イチヨウ



豊かな自然、学芸の森

東京学芸大学を初めて訪れた人のうち、緑溢れるキャンパス環境を第一印象としてあげる人は少なくないでしょう。

現在、東京学芸大学には4500本の中高木があります。低木を含めるとその数は1万を超えると推定されます。

学芸の森、その歩み

1万本を超える大学の樹木も、昔から学内に存在していたわけではありません。信じられないかもしれませんが、大学創立当時(1949年)の小金井のキャンパスには、背の低いわずかな木しか生えていなかったのです。これは、ここに旧陸軍が技術研究所を設立した時(1940～1942年)に多くの木々を伐採し、地ならしをしたことによります。

現在、大学の一つの顔である正門前と東門通りのケヤキは、1963年から植樹が進められたものです。また、自然館(自然科学系研究棟1号館)南側にあるヒマラヤスギ並木が植えられたのは1965年のことでした。



正門前

学芸の森、まるで植物園

大学が本格的な自然環境整備を始めてから20年余りで、学内のいたるところに多様な木々が植えられました。その結果、70年代中頃には250種近い木々が学内に存在するようになりました。また、生協の南側にある池周辺には50種近い万葉植物が植えられ、池は「万葉池」と呼ばれるようになりました。

こうして、大学を訪れた人々から「まるで植物園のようだ」と言われるまでに豊かな自然環境が形成されたのです。これは当時の人々が大学の自然を考えて植栽プランを実行した成果に他なりません。

ハナミズキ



万葉池



学芸の森は、危機に瀕しています

しかし、かつては250種近くあった学内の木々も、現在は200程度に減少しています。これは新築の建物工事で伐採されたもの、そして、寿命で枯死したものがある他、生長した高木が作る日陰のため枯死したり、衰えたりする植物も数多くあるためです。

過去にはキャンパス内の植栽を管理する常勤職員が6人いた時代もありましたが、度重なる定員削減の結果、今日その数は0となっています。そして大学法人化により、国から大学へ降りる予算は年々減少し続けています。



衰えた木



ハナツクバネウツギ

学芸の森には、こんな構想があります

「学芸の森プロジェクト」は、学芸大学の豊かな自然環境を維持し、かつ文化の薫る森を創造するために組織された、大学公式のプロジェクトです。

次の4つの構想を中心として、学内の自然環境整備を行っています。

1 構内各所において、四季折々に多様な植物の多様な状態が見られる自然環境の整備

さまざまな花、その香り、そして、若葉、実、紅葉など、人々の心に語りかける樹木や草花を構内全体に配置します。これらの植栽は多様な鳥や昆虫が学内で生きる環境作りにもつながります。

2 水辺環境の整備

水辺のある環境は、学芸の森をさらに豊かなものへ発展させます。構内には豊富な地下水脈も存在します。現在、大学、附属小学校、附属幼稚園のコラボレーションによる、子どもの水辺プロジェクトを進行中です。

3 植栽のテーマゾーン設定と整備

従来、構内の通りや一部の地区は特定の樹木によってゾーニングされていました。しかし、これらの樹木の中には、老朽化や高木による日陰の影響により荒廃したものも見受けられます。

新たなる植樹や高木の枝払いなどの整備を行うと共に、草花や低木の植栽により特徴ある地区を作り出します。

4 自然環境の教育的利用

構内の豊かな自然環境は教育的にも利用価値が高いものです。学内の人々や地域の住民が豊かな自然環境を理解できるよう、汎用性のある啓蒙的ガイドや教育プログラムを考えます。

みんなで作ろう、学芸の森

できることから少しずつ、これが学芸の森プロジェクトの基本的な考え方です。在学生、教職員、卒業生そして地域住民の方々も含め、私たち一人一人の手で豊かな学芸の森を育てるため、草木の提供、植栽作業の参加、植物情報の提供、植物や鳥の写真提供など、多様な形での「森作り参加者」を求めています。

お問い合わせ: moripuro@u-gakugei.ac.jp
詳しい活動内容は、ホームページをご覧ください。
<http://www.u-gakugei.ac.jp/~moripuro/index.htm>

文章:真山 茂樹 デザイン:正木 賢一、嶽 里永子



レモン



こんなにあります「公開講座」

本学では、地域に開かれた大学として、現職教員や地域住民のニーズに応える「東京学芸大学公開講座」を実施しております。今後とも、現職教員等及び地域住民の方々が、公開講座に積極的に参加されることを期待して

おります。なお、平成18年度東京学芸大学公開講座の実施案内については、3月下旬以降ホームページ等で案内する予定です。

「平成17年度東京学芸大学公開講座（一覧）」

講座名	実施日	定員
第3回日本伝統音楽入門～誰もが吹ける尺八～（初心者コース）	5/10～7/26 7/12を除く毎週火曜日	20
第3回日本伝統音楽入門～誰もが吹ける尺八～（中級者コース）	5/10～7/26 7/12を除く毎週火曜日	18
特別支援教育の基礎と実践（2）－軽度発達障害の理解と支援－	6/4（土）	80
’05 日本の太鼓を楽しもう（初級）	5/26～7/7 毎週木曜日	24
’05 篠笛を楽しもう（初級）	5/27～7/15 毎週金曜日	20
バリ島のガムラン音楽を体験してみよう	6/2～7/21 毎週木曜日	25
教師のためのデジタル表現入門教室	7/26（火）～7/28（木）	25
版画教室（銅版画）	7/26（火）～7/30（土）	15
幼児期の言葉の発達とその援助	7/26（火）～7/28（木）	30
夏期油絵教室	7/27（水）～7/30（土）	35
保育における環境と幼児の遊び・学び	7/28（木）～7/30（土）	50
特別支援教育における指導法の理論と実務	7/28（木）・29（金）	120
楽しくできる保健学習の基礎基本	7/28（木）・29（金）	20
「学級崩壊」の克服に向けた身体づくり－教育方法としての教師の身体－	7/28（木）・29（金）	15
はじめての日本画講座・木版画と日本画の併用技法	7/30（土）～8/3（水）	20
美術表現～保育の援助のための理論と技能～	8/1（月）～8/3（水）	30
教師のためのインターネット入門教室	8/2（火）～8/4（木）	25
フレスコ画教室2	8/2（火）～8/5（金）	30
教師のための成績処理入門教室	8/9（火）～8/11（木）	25
特別支援教育の教育実践研究講座（2）	8/18（木）・19（金）	150
雅楽を演奏してみよう	8/20（土）・21（日）	25
楽しい金属工芸	8/22（月）～8/26（金）	15
鍛金による錫製オリジナル食器制作	8/24（水）～8/26（金）	25
リフレッシュ理科－感動わくわく体験	8/25（木）～8/27（土）	50
怒りをコントロールできない子への援助	8/27（土）	150
いっしょに学び、ともに生きるⅡ	8/27（土）、10/1（土）、11/5（土）、12/3（土）	80
健康テニス教室	10/5～11/30 11/23を除く毎週水曜日	30
わくわく柔道	10/16～11/13 10/30を除く毎週日曜日	20
’05 日本の太鼓を楽しもう（中級）	10/20～12/22 11/3を除く毎週木曜日	24

【問合せ先】東京学芸大学総務部企画課社会連携係

TEL 042-329-7119/FAX 042-329-7128

E-MAIL renkei@u-gakugei.ac.jp/ ホームページ: <http://www.u-gakugei.ac.jp/>

造形美術教室（教養系）の公開講座紹介

造形美術教室は教養系が発足以来、洋画、日本画、彫刻、デザイン、工芸、造形芸術学と専門性を重視しつつ、美術分野で幅広い人材を育成し世に輩出してきた教室です。平成17年度公開講座では油絵、フレスコ画、日本画、金属工芸の4講座が開講され、教職員、一般、学生と多くの方が参加されました。今後もそれぞれの専門領域を生かした公開講座を毎年行っていく予定ですので、多くの参加を募集いたします。

夏季油絵教室（担当：金子 亨先生）

7月27日（午前）は本学教員と宮原むつ美氏（スペイン在画家）による描画材の紹介、油彩による基本的な描画法の解説、午後から28日午後まで静物油彩画制作、7月29日・30日は人物油彩画制作が行われました。作品の大きさは8号から15号位のキャンバスにて制作し、日頃制作されている作品の講評も行われました。



はじめての日本画講座・木版画と日本画の併用技法（担当：荒井 経先生）

日本画は伝統的な技法や材料に支えられた魅力の一方で、その特殊性から取り付きにくいものと考えられがちです。

この公開講座では、かしまった日本画の世界に親しみやすい木版画を導入することで、初心者にもわかりやすい豊かな表現を体験していただきました。



フレスコ画教室2（担当：金子 亨先生）

フランス在住のフランス文化省公認壁画修復家、フレスコ画家、名古屋芸術大学名誉教授、また多くの教育文化活動を展開している高橋久雄先生を指導者にお迎えしての、本学教官・学生連携による講座です。フランスの教会等のフレスコ画修復実践例の解説により文化財の保存についての理解を深め、フレスコ画の美術教育教材としての可能性と日常生活の環境を豊かにするための壁画装飾への活用を考えます。

鍛金による錫製オリジナル食器制作（担当：古瀬 政弘先生）

錫は錆びず柔軟な金属であり、人体に無害で昔から酒器などに使用されています。今回は錫を鍛金技術で成形したものに、加飾して料理用小皿及びカップ制作を行いました。制作を通して錫の造形的魅力や可能性を体感していただくとともに、学校教材としての展開も現職教員の方と検討する機会ともなりました。最後に受講者の方と制作したオリジナル食器を使用して講評会を行い、ものづくりと人の繋がりを考える3日間となりました。



1年をふりかえる

幹事長 池田 義人

平成17年度の辟雍会活動は4月13日（水）の幹事会で幕を開けた。冒頭において荒尾会長より今年度の基本方針が示された。それは「飛躍する第二ステージへ」という題でホームページ上に公開されている。要約させてもらうと、あくまでも「組織の充実」が重要であるが、大学が創立されて既に50年以上経過してからの出発となった辟雍会にとって、50年という時間的空白は如何ともし難く、会員獲得のためにはさまざまな困難が存在して来ている。しかし辟雍会はこの困難を「負」とばかりに考えず、むしろ「利」となっている部分をうまく捉えてみる必要があるのではないか。今の時代であるからこそ可能になる新しい発想のもとで、飛躍の第二ステージを踏んでいこうではないか。何をやるにしてもいつも組織の充実に役立つことかどうかということを考えよう。その意味では、組織の充実と事業の展開は互いに車の両輪、コインの裏表の関係にある。具体的な検討のなかで常にこのことを念頭において欲しい、という前向きな意思をお示ししていただいたものと捉えている。幹事会は今年度この基本方針に沿って活動していくことが確認され、引き続いて各部よりの活動計画が予算要求とともに示された。

幹事会はこのほか本稿の執筆時まで、5月20日、7月25日、9月26日、10月13日、10月26日、12月21日の計7回開催している。ただし、10月13日の幹事会は双六の復刻事業の是非のみに限定した臨時特別幹事会であった。

東京学芸大学附属図書館所蔵の絵双六の復刻の話が持ち上がったのは、今年の年はじめのことである。従って、既に昨年度からこの問題は検討されているが、事業の趣旨、主体、辟雍会との関連などで深い議論となり、その後かなり長期間の検討が行われるに至った。しかし、双

六の復刻そのものには辟雍会の目的にも通じる教育・文化の発展に寄与する一面があること、大学との連携に意味があること、辟雍会の資金を提供しても損失の怖れが少ないことなどからこの件は採択され、来年早々にも双六の復刻版が東京学芸大学出版会より刊行されることになった。この間の長い議論は辟雍会活動のこの一年を振り返るにあたって、無視できない重要なことであったと思う。

辟雍会の活動はまず幹事会で提案され、提案母体である部に所属する幹事を中心に実行されているが、もちろん理事会の承認が必要である。その意味で、全国各地の理事が参集する理事会は重要であり、平成17年度の理事会は5月28日に開催されている。出席理事は荒尾禎秀、鷺山恭彦、馬淵貞利、東原昌郎、吉野尚也、村上英興、五日市稔、草野剛、山本一雄、玉林尚之、遠藤満雄、青木登、井口太、筒石賢昭、金子義和、池田義人の合計16名であり、これに幹事会メンバーの8人が実務を担当する立場から加わっている。

今回の理事会の中心はまず平成16年度の事業報告と決算報告および監査報告の承認であり、次に平成17年度の事業計画案および予算案の審議である。加えて、会費に関する規則や慶弔規則の制定について、また、個人情報取り扱いについて、支部の設置についてなどが議論された。詳しい内容は辟雍会通信第3号、およびホームページなどで掲載されているので参照してもらいたい。ここでは特に「会長候補者推薦委員会の設置」について述べておく。辟雍会の会長任期は2年と定められている。もちろん再選は何度でもあり得るのであるが、他の理事や幹事長の任期も2年で、会長が委嘱して決めることになっている。従って会長人事のみが実質的な最重要事である。まだ黎明期にある辟雍会ではあまり問題に

ならないかもしれないが、会長人事に対する会員の参加は重要で、今後の制度の成熟により、この重要事が公正に、できるだけ民主的な手続きによって行われるようになることを望んでおきたい。2時間の予定の会議は延々と4時間におよび、白熱した議論が交わされるなか、全国同窓会を何とかいい会にしていこうという熱意が伝わる会議であった。

辟雍会のもうひとつの重要な会議は全国代表者会議である。本来は総会があってそこが最も重要な決議機関となるのであるが、辟雍会は構成者の規模が大きい全国組織なので、この全国代表者会議が総会の代わりとなり得ることが会則として決まっている。本年度の全国代表者会議は11月5日に東京学芸大学の第一会議室で47名の出席者を得て開催された。この会議の内容についても議事録がホームページ上で公開されるのでご覧いただきたい。今回の代表者会議で特筆すべきことは、岩手県支部と富山県支部、および石川県支部の設立が報告され、承認されたことであろう。これで既に承認されている青森県支部と合わせて4つの支部が生まれており、また参加者の声のなかから、秋田県支部などいくつかの県の支部設立の可能性も生まれてきている。はじめに述べた荒尾会長の表明にあるように、50年の空白はそう簡単に埋まるものではない。全国47都道府県にくまなく支部が出来るまでにはかなりの時間が必要であろう。しかし

までも会員は全国にくまなく存在している。呼びかけに応じて支部が出来る可能性はどの都道府県にもある。47都道府県からの代表者が揃う日も決して夢ではないし、夢にしてはいけない。

代表者会議のあとで第一回辟雍会音楽祭が東京学芸大学芸術館において行われた。NHK交響楽団のホルン奏者である今井仁志さんをお迎えしての演奏会は東京学芸大学音楽科教員および東京学芸大学音楽科同窓会「つわぶき」の全面的な協力のもとでたいへんに素晴らしいものであった。この演奏会の一部始終はDVDに録画されているので、いずれご覧いただける機会もあるのではないかと考えている。

最後になるが、11月23日の勤労感謝の日に、辟雍会主催により行われた「ふれ愛ラン&ウォーク」の試みについて触れておきたい。折からの晴天にめぐまれ、美しい秋空の下で、走ったり歩いたり、あるいは青空キャンパス（各種講座）などを通じて、老若男女、障害のある人とない人など、さまざまな人々が共に集い、触れ合う場にはとても斬新で素晴らしいものがあつた。これまでの事業ではあまり目立つことの無かった学生会員の積極的な参加も多くみられ、今後の辟雍会活動の在り方を示唆する試みであつたと思う。こうしたいい試みの継続性が今後何よりも重要になると考えている。





「働くってことをまじめに話してみる会」

事業部長
筒石 賢昭

事業部の活動を報告いたします。といってもこの機関誌を最初から読んでくださった方には33ページの「音楽祭」、28ページ～29ページの「RUN&WALK」の記事を目に留めてくださったと思います。これらは05年度（平成17年度）の事業部の大きな活動でした。それぞれにご協力いただいた方々に改めて深く感謝いたします。ここではもう一つの大きな柱であった学生支援事業について報告いたします。

「働くってことをまじめに話してみる会」についてです。ホームページをごらんいただいている方にはお分かりでしょうが、これはNPOである「日本キャリア・カウンセリング研究会（JCC）」と連携して行なったもので、昨秋の小金井祭期間中（11月5日）と今年に入ってから1月28日と2回開催いたしました。

カウンセラーなどの専門家を含む社会人と学生、院生が少人数に分かれて語り合うこの企画はJCCがすでに各地で行なって成果を上げているものです。

東京学芸大学の学生・院生は、教員を目指すものが多いせいか、進路やキャリアに対する意識が総じて低いようです。そのためか卒業年度になって初めて自らの就職や仕事について考え始めると言う場合が多いようです。

教員を目指すにしても、企業や公務員を目指すにしても、仕事とはどういうものなのか、働くとは自分にとってどのような意味を持つのかを、繰り返し考えてみるのが重要でしょう。当初の希望通り教員になるにしても、学校現場の現実を踏まえつつ、教師という仕事につく自らの姿をイメージしてみることは決して無駄ではないはずです。この企画はそうした話し合いの場を設定するものでした。

就職活動ということに関しては他大学と比べてのんびりムードの漂う本学ですが、こうした企画を通じて多少なりとも進路やキャリアに対する意識を高めていければ、と思っています。

また、この企画には学外からの参加も認めておりますので、継続していけば他大学の人、あるいは同年齢で違う業種の人と交流する機会も広がっていくものと期待しています。近頃、職業観の歪みや勤労観の未熟さが問題視されておりますが、この事業はそうした風潮に対して全国同窓会「辟雍会」が行なう社会貢献の一つだと確信しております。ご理解、ご支援のほど、よろしくお願いいたします。



■ 辟雍会通信の発行—そして学生会員のつながりを

組織部長
 井口太

同窓会を組織するのが仕事ですから、同じ学舎で学んだ友、先輩後輩が親しく手を取り合い、出来上がった輪を一層広げていく。もって同窓会の組織が拡充すれば良いのであります。楽しく意義ある仕事と思って引き受けたのですが、見通しが甘かったようです。冗談はさておき、本当は極めて重要で、会が存続する限り終わることのない仕事であると言えます。

組織部の仕事は、第一に会員の獲得です。スタートした翌年の入学生から、入学手続きの際に入会をお願いしました。多くの新入生が入会してくれました。また、大学の教職員ならびにそのOBの皆さんの入会をいただきました。なお、一層ご理解をいただき、加入していただくように進めて参ります。この「入会」とはすなわち、終身会費2万円をいただくことですから、これなしには何も始まらない重要な仕事です。

併せて、大切なのは会員の住所等の情報を整備し、管理すること、まだ入会されていない多くの方へお誘いを

送るための情報を入手することも、大切な業務です。これまで、3号の『辟雍会通信』を作成し、皆様へお送りしてきました。現在、辟雍会の会員証が出来上がり、少しずつ配布を始めております。今後、このカード式会員証を行事等へのご参加の際、参加費の軽減などの形で特典を得られるように利用することを考えております。

大学内での業務として、現在計画中のものは、入会された学生会員の横のつながりを作り、学生の会として行事を計画するなどのことを推進したいという計画です。学生の会が、新入生を歓迎したり、小金井祭で大学の歴史的遺産や将来の展望などの企画展示ができれば良いのではないかと考えています。

いずれにしても、コツコツと焦らずに、しかし休むことなく会の組織拡充を願って進めて参りますが、これは皆様のご理解とお支えがなくてはできない仕事です。今後とも熱いご支援をいただきますよう、お願い致します。





ホームページのご案内と参加の呼びかけ

広報部長
遠藤 満雄

http://www.u-gakugei.ac.jp/~dousou/・・・、パソコンになじんでいる方はご存知ですね。「パソコンはちょっと」という方には何のことかわからないかもしれません。上記のアルファベットの羅列は、辟雍会のホームページの「アドレス」です。パソコンに向かってこの“暗号”を入力すると、別掲のようなホームページの「表紙」が現れます。

いつもごらんいただいている方には「大きなお世話」の話ですが、まだご覧いただいたことのないメンバー向けにちょっとご案内いたします。またそんな記事あったかな？とお思いのむきもあるかもしれませんので、ご確認ください。

このホームページの管理、運営は広報部が受け持っております。

理事会や幹事会、各部の報告など、「公式」のお知らせコーナーがあります。また事業や行事のご案内があります。さらに季節に添った話題も提供しています。

さらに「College Information」というコーナーがあります。その一部を次ページに再録してみました。これは今キャンパスで起こっていること、話題になっていることなどを取材して報告するコーナーです。辟雍会の特約通信員として、放送研究会の学生たちが担当してくれています。

卒業して〇〇年、以来一度も小金井のキャンパスに足

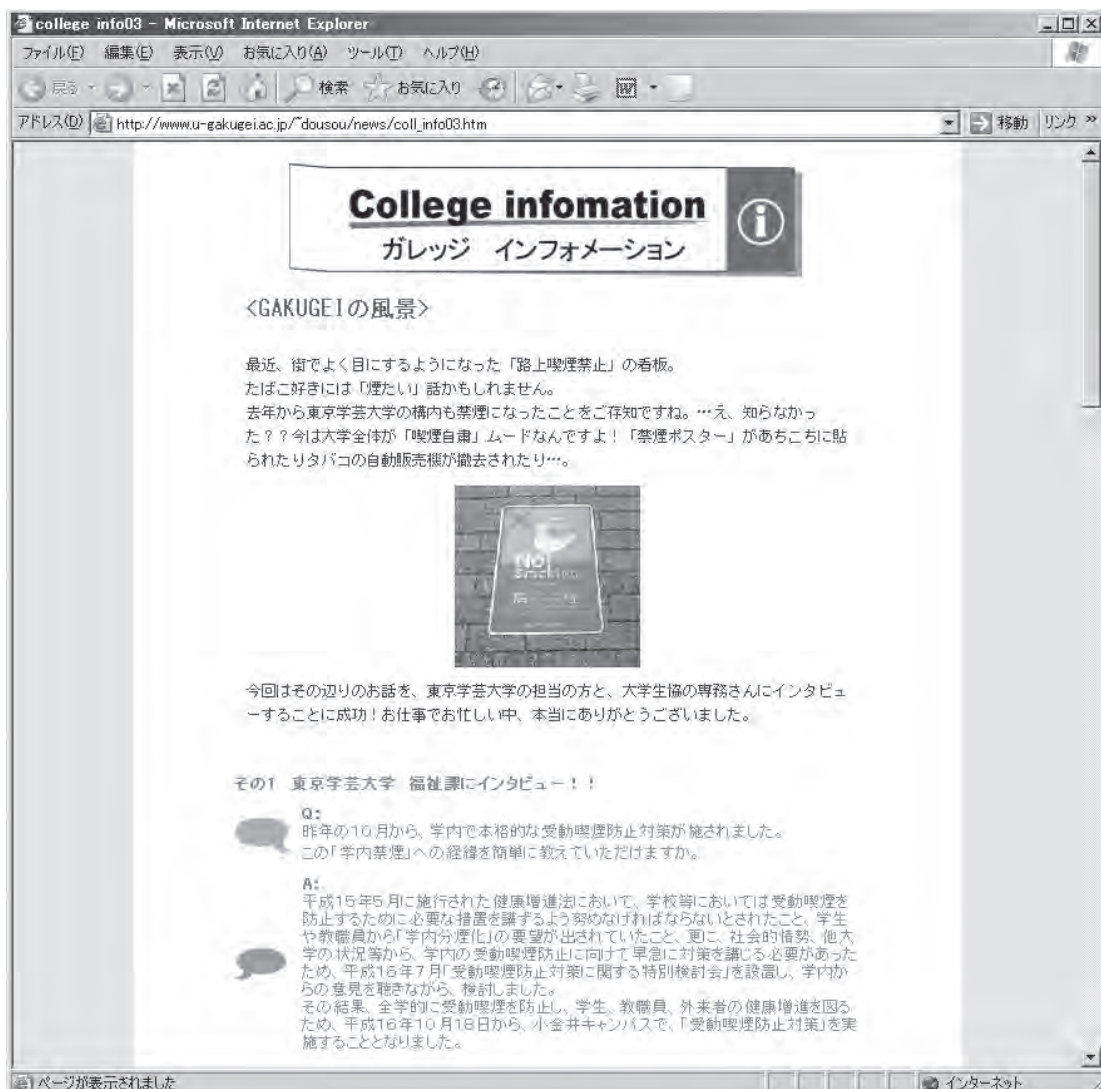


を運んだことがない、という卒業生もかなりいるものと思います。正直言って、ずいぶん変わりましたよ。風景も変わりましたし、大学の制度、環境も変わりました。学生の気質と言うのでしょうか、考え方や生活態度も変わりました。そんなただいま現在の「東京学芸大学」を知るためのコーナーだと自負しております。

実はこうしたコーナーをどんどん拡充、充実させていきたいと思っているのです。「特約通信員」という言葉を使いましたが、いまのところこの通信員は放送研究会の学生だけです。このネットワークをどんどん広げていきたいのです。教授、助教授など大学職員、各分野の卒

業生、クラス会やサークルのOB・OG会、地方の県人会や同窓会の中にこうした通信員を置いていきたいと思うのです。といっても別段、難しいことでも厄介なことでもありません。皆様の身近に起こった話題をその都度、このホームページ宛に寄せてくださればいいのです。ホームページのいいところはいつでも掲載可能なこと（つまり締め切りがない）、更新や追加が自由自在であることなどです。皆様の振るってのご参加を希望いたします。なお原稿は下記のメールアドレスに送っていただくと助かります。

dousou@u-gakugei.ac.jp



編集後記

これは「辟雍」第2号です。と言うことは全国同窓会「辟雍会」は設立3年を迎えたということになります。2号の編集に先立って、いくつかよその同窓会機関誌と言うものをめくってみました。長い伝統を持った大学の同窓会では、それはそれは立派な体裁の機関誌を作っております。でもなんだか釈然としません。確かに同窓生の情報交換の場になってはいるのですが、共通して「懐古趣味」が強すぎるのです。多くは「昔話」に割かれています。

「辟雍」はそんなふうにはしたくないな、という想いがありました。もっと「今」を、そして「未来」を見つめたいと思うのです。

と言うわけで、今号は現役の学生たちに集まってもらって「就職」をテーマにした座談会をしました。卒業生の寄稿も「後輩たちへのメッセージ」を込めて欲しいと注文しました。そんな編集方針を嗅ぎ取っていただけでしょうか。

先ごろ台東区の谷中を散歩しました。徳川家の墓地の近くに「五重塔」跡があります。幸田露伴の名作「五重塔」のモデルになった塔です。露伴の「五重塔」は何度読んでも胸に迫ります。話の運びもさることながら日本語の美しさに息をのみます。当然、今はなき五重塔の姿

に思いを馳せます。

江戸時代、江戸には5つの五重塔があったそうです。浅草寺、上野・寛永寺、芝・増上寺、池上・本門寺、そして谷中・天王寺の五重塔です。天王寺のものを除いて明治以降太平洋戦争終了までにごとごとく消失いたしました。関東大震災、そして東京空襲のせいです。ただひとつ天王寺のものが残ったのですが、なんと昭和32年(1957)、男女の心中事件のとぼっちりで全焼してしまっただけです。その男女(中年男と20歳過ぎの娘)は、不倫関係を清算するのに死を選び、その五重塔の歴史やいわくには頓着なく火を放ったのでした。

いまさら二人の死をなじったところで始まりませんが、二人の命とともに五重塔は再び戻らないのです。

何が言いたいのかというと、失われたものは再び戻らないということです。守旧という古臭いことのようにですが、守るものは守らないといけません。谷中を歩きながらしきりとそんなことを思いました。露伴の名文を思い出しながら、日本語はやはり縦書きで読まなくてはダメだな、何ぞとも思いました。この機関誌は左開きの横書きです。次からはこのあたりも再考したいもの、なんて思ったものでした。

ご批判、ご意見をお待ちしております。

(編集長・遠藤 満雄)

辟雍会(東京学芸大学全国同窓会)機関誌 第2号

発行日 2006(平成18)年3月1日

事務所 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1
東京学芸大学20周年記念館内
電話/FAX 042(321)8820
E-mail dousou@u-gakugei.ac.jp

発行責任者 荒尾 頌 秀

編集責任者 遠藤 満 雄

表紙デザイン 正木 賢 一・新名 佐和子

印刷所 (有)サンプロセス
〒207-0012
東京都東大和市新堀1丁目1435-29
電話 042-561-8810

編集スタッフ(広報紙)

守屋 敦子(60年家庭科卒)

遠藤 満雄(68年社会科卒)

鳴海 多恵子(71年家庭科卒)

真山 茂樹(78年理科卒)

古瀬 政弘(88年美術科卒)

中農 朋子(89年数学科卒)

井上 録郎